

# オケとヲケの物語をn次創作する

## —芸能・場所・心情—

橋本 裕之

### 1 オケとヲケの物語

私は平成30年度と平成31年度・令和元年度の2年間にわたって、奈良県立万葉文化館の委託共同研究「現代社会における古代文化の二次創作—サブカルチャーが描いた記紀・万葉集—」を主宰した。共同研究の目的は記紀・万葉に取材したアニメやマンガを取り上げながら、記紀・万葉がサブカルチャーの諸領域においてどう受容されてどう発信されているのかを問うことによって、現代社会において古代文化が二次創作されている様態を民俗誌的に描き出すというものだった。

だが、この共同研究は民俗誌的な調査研究を蓄積しながらも、いわゆる調査研究の範囲を乗り越えて社会実験の可能性を模索した。すなわち、万葉文化館において古代文化の二次創作に着手するプロジェクトに関する基本的な構想を策定することをもめざしたのである。実際は記紀・万葉に取材した短編アニメを制作して万葉文化館の展示に資することを最終的な目標として設定しており、本共同研究はその第一歩として位置づけられるべきものであった。

本稿の冒頭で共同研究の目的を再説したのは、本稿で取り上げるオケとヲケの物語がこうした二重の目的に最もふさわしい素材であると考えているためである。私は平成30年(2018)6月23日に開催された平成30年度第1回研究会において、万葉文化館の近くにヲケノミコ(後の顕宗天皇)を祀る弘計皇子神社が鎮座していることを知らされた。指導研究員の井上さやかさんが紹介してくださったのである。私は即座にオケノミコとヲケノミコという二皇子、後の仁賢天皇と顕宗天皇にまつわる物語を思い出した。というのも、私は小学生だったころ、和歌森太郎・カゴ直利の『学習漫画日本の歴史』を愛読しており、第1巻(国づくりの英雄)<sup>①</sup>に登場する二皇子の物語に出会って、強い印象を抱いていた。それは自分でも驚いてしまうくらい一部始終を記憶していたことによってもわかるだろう。

井上さんが紹介してくださったのは、令和2年(2020)が『日本書紀』編纂1300年に相当しており、共同研究においても『日本書紀』に登場する二皇子を取り上げることを期待しておられたせいかもしれない。だが、弘計皇子神社は予想していた以上に、私たちの想像力を刺激した。私たちは翌日の平成30年6月24日に開催された平成30年度第2回研究会の一環として、第1回現地調査として明日香村内を巡検したさい、井上さんに案内していただいて中の川(八釣川)沿いに位置する弘計皇子神社に参拝することができた。鬱蒼とした木立を抜けた狭い境内は静寂に包まれており、タイムスリップを体験したような不思議な気分が襲われたことを鮮明に記憶している。その場所は近飛鳥八釣宮の伝承地ともいわれており、近くに6世紀中頃~7世紀前半に作られた八釣マキト古墳群が点在している。阿部乾六は弘計皇子神社について、こう述べている。

村をひととおり歩いた後でも、尚この神社に気付かない人があるくらいだという。村中に鳥居が無く、標識も無いのでは発見しにくいのも当然。万策尽きた人が屋並みを出はずれ、暫く歩いたあと、小さな森を道端に発見し、まさかと思いつつも暗い木立の間へ首を入れた時、その人は薄い木洩れ陽を受けて僅かに存在を主張している石鳥居に気付く。／村から東を指して登る道、つまり高家道を登って一五〇<sub>〇</sub>進んだ右側に、大小の杉が身を寄せ合って密林を為している。その裾を洗うように谷川(八釣川)が流れくだって、ささやかな音を立てている。ただそれだけの林。どこでも

見かけるとおり、畑と畑、田と田、森と森などの所有地境界を示す並木、と思ひ込んで通り過ぎる人の多いのはもっとものこと。／浸食が進んで四<sup>尺</sup>の深さの溪谷となった八釣川。その崖上の小密林。その木下蔭に間口四、奥行八、高さ三<sup>尺</sup>の空間を辛くも確保して、そこにスッキリ納まる規模の石鳥居、拜殿、社殿を揃えたミニチュア神社。一本の石碑も一枚の額も見当たらない簡素さ。伝承によってのみ、ここが弘計皇子神社と判るのである<sup>(2)</sup>。

それにしても、私はどうして即座に二皇子の物語を思い出すことができたのだろうか。昭和 40 年代の「学習漫画」だから今日のアニメやマンガが受容されている状況に重ね合わせてしまうことは躊躇せざるを得ないが、私自身マンガというメディアに依拠することによってこそ、二皇子の物語を記憶していたことはまちがいない。私の個人的なエピソードは古代文化がサブカルチャーの諸領域においてどう受容されてどう発信されているのかを知らせる身近な一例であるといえるだろう。

本稿はこうした視座に立脚した上で、現代社会において古代文化が二次創作されている様態の好例として、オケノミコとヲケノミコという二皇子の物語を取り上げてみたい。だが、二皇子の物語は長い年月を通していわば n 次創作されてきており、さまざまな地点に散布されているため、現代社会における古代文化の二次創作として限定するべきものであるとも思われぬ。したがって、本稿は二皇子の物語が n 次創作されてきた過程、つまり後世にどう受容されて発信されてきたのかを見渡した上で、この物語が芸能・場所・心情という三つの支点に大きな役割を付与しており、後世に受容されて発信されるさいも三つの支点に大きく依拠している消息を浮き上がらせたい。

とりわけ芸能に関する特徴的な傾向は、二皇子の物語がアニメというメディアとも高い親和性を持っていることを示唆している。だからこそ共同研究が提示した二重の目的に最もふさわしい素材であると考えているのだが、本稿は二皇子の物語に関する概略を紹介した上で、二皇子の物語が芸能に彩られている消息を指摘した成果を概観する。一方、播磨におけるいくつかの神社において二皇子が祭神として祀られており社名にも反映されていることを確認した後、二皇子の物語が神社の祭祀に投影されている興味深い事例を紹介する。また、丹後にも二皇子を祀る神社がいくつか存在しており、二皇子の物語が祭祀に投影されている事例もいくつか確認されているので、概略を紹介する。こうした状況は二皇子の物語が個別的な場所に結びつけられることによって、地域社会における伝承として定着していった過程を示唆しているはずである。

芸能と場所という二つの支点によって維持されてきた二皇子の物語は、文学作品や舞台作品にも展開している。実際は能や狂言、そしてマンガにも転位しているのである。そして、二皇子の物語が n 次創作されてきた過程における最新のテキストとして、共同研究において短編アニメの企画を提案したしもかわらゆみの成果を位置づけてみたい。こうした文芸化を推進する契機としても芸能と場所という二つの支点が重要であることはいうまでもないが、三つめの支点として二皇子の物語に内在する普遍的な心情、とりわけ善良な心情も強調しておきたい。以上あげた三つの支点は、二皇子の物語を短編アニメ化するさいにも必要不可欠な要素でもあると考えている。

n 次創作についても説明しておこう。浜野智史は「一つの作品が基点となって派生作品（二次創作）が生み出されるだけでなく、派生作品（二次創作）がまた別の作品（三次創作）にとっての部品（モジュール）としての役割をはたしていき、その三次作品がまた別の……という一連のプロセスを、「N 次創作」と呼ぶことができます。」<sup>(3)</sup>という。また、岡本健はこうした現象が観光にも見られることを指摘して、「個人個人が情報発信を行い。それによって構築される観光を「n 次創作観光」とし」ている。岡本は「元々の概念は「N 次創作」と N が大文字であったが」、「個人個人の情報の編集や発信の集積によって観光が構築されていくイメージをより鮮明に示すため「n 次創作観光」と、小文字の n を用い

たい。』<sup>(4)</sup>と述べている。本稿においても両者の所説を継承して、二皇子の物語が次々に展開する現在進行形の現象を分析するさい、n次創作という表現を用いる。

ここでオケノミコとヲケノミコという二皇子、後の仁賢天皇と顕宗天皇にまつわる物語を概観しておきたい。あらためて私が二皇子の物語に出会った最初のテキストとして、和歌森太郎・カゴ直利『学習漫画日本の歴史』第1巻(国づくりの英雄)の「第七話 大王の身うちの争い」に描かれた二皇子の物語を紹介する。わずか2ページ強だが、私に強い印象を形成させているので、文章の部分のみ全文引用してみる。対応する絵がなくても、概要は十分伝わるだろう。以下の数字はコマの番号である。二皇子は「うたい、ことをひくふたりの若者」<sup>(5)</sup>として登場している。

雄略天皇がなくなってからは、清寧天皇が大和朝廷の中心となりました。この天皇は生まれたときから白髪で、一生のあいだきさきをもたなかったのです。

24 わたしも年とった 国中にふれをだして

25 あとつぎの大皇子をさがせ どこかに大王の身うちの者がいるはずじゃ

そのころ播磨国(兵庫県)のある部落で新築祝いのさかもりがあり、役人の前でうたい、ことをひくふたりの若者がありました。

26 みりのの田をば吹く風が川ばた柳をふいている 水にうつったそのかげがなびきあってみえるけど ほんとのほんとの柳のかたちはかわらない

27 ほろをまとえどうたはりっぱだ もっとうたえ

28 日本の国は広い たくさんカヤがなぎいてる そこに太陽の神につかえるものがある わたしをごらん わたしが神につかえるものだ

29 いまのうたはただものではない もしやあなたは大王の……

30 われら兄弟はながい間ここで牛かいや台所ではたらいてきたが イチノベノオシワ皇子の子です

ふたりの兄弟は、兄をオオケノミコ、弟をオケノミコといました。ふたりはまもなく大王にあいました。

31 さてさてどちらを大王をつく大皇子にしてよいか……

兄弟はおたがいに大皇子になることをゆずりあいました。ゆずりあいは美しいが、それは豪族たちに、すきをあたえることになってしまいました。

32 オオケノミコこそ 大皇子に! いやつぎの大王は オケノミコだ!

豪族のかつてな争いのうちに清寧天皇がなくなり、しばらくは大王のいない時代がありました。

そこで大臣のヘグリノマドリは、

33 わしは命をかけても弟のオケノミコを大王にする

こうしてオケノミコが大王(顕宗)となりましたが、この大王はマドリにだけはどんなむりをいわれてもききいれたのです。けれども三年してなくなりました。

34 つぎの大王はオオケノミコがつぎ……

35 仁賢天皇といわれる いまは大王の位まで大臣のいうままにきめられる……

36 牛かいの時代がなつかしい あのころも苦しかった だがいまよりたのしかった……<sup>(6)</sup>

こうした内容は『日本書紀』に登場する二皇子の物語を縮約したと考えられる。だが、『日本書紀』のみならず『古事記』や『播磨国風土記』にも描かれた二皇子の物語は、複雑かつ多岐にわたっている。前掲した内容は概略として必ずしも適切であるということとはできないだろう。だが、二皇子の物語に出会った無数の読者は、例外なく何らかのテキストに横断されている。そして、私自身にとってみれば、

このテキストが初発の一撃だったわけである。したがって、最新のテキストであるしもかわらの成果にしても、誰かに初発の一撃をもたらす可能性を持っているのである。しもかわらの成果も文章の部分のみ引用してみたい。実際は弘計皇子神社を取り上げた作品において、「億計弘計の物語」を概略している。

古代、履中天皇の皇子である市辺押磐皇子(いちのへのおしはのみこ)は従弟である雄略天皇に殺害される。その子であった幼い億計王(おけのみこ)弘計王(をけのみこ)兄弟は二人の従者に連れられ逃亡し、身分を隠した20年以上にも及ぶ苦難の日々を送ることになる。／清寧2年(481年)、新嘗祭の供物を献るため、伊予来部小楯(いよのくめべのおだて)が播磨に遣わされた時、縮見屯倉首(しじみのみやけのおびと)の館で新築祝いが催されたのだが、「丹波小子(たにはのわらわ)」と名乗りこの家で使われていた億計王・弘計王が祝いの余興するよう命じられる。二人は譲り合うが、億計が舞った後、弘計が自分たちの身分を明かす歌を歌ったことによって、小楯は兄弟が市辺押磐皇子の子である事を知る。／小楯の報せを受けた清寧天皇(雄略の子)は、「天は大きな恵みを垂れて、二人の皇子を賜った」と喜び、二人の皇子を迎えさせた。名乗り出たら殺されるかも知れないという二人の怖れは、幸いにして杞憂に終わった。／清寧5年(484年)1月、妻子のなかった清寧天皇が崩御すると、兄の億計は「勇気を奮って最初に名乗り出たのは弟の弘計だから弟が即位すべき」、弟の弘計は「皇太子であり兄である億計が即位すべき」と互いに皇位を譲り合った。この間の数ヶ月、不在になった天皇の務めを二人の姉(叔母との説もある)飯豊皇女が政務を執った。／やがて顕宗元年(485年)正月元日、兄の説得におれた弟の弘計王が顕宗天皇として、35歳で即位する。皇太子は先帝・清寧天皇の時そのままに、兄の億計王が務めたが、弟である天皇の兄が皇太子という事態は、他に例がない。／3年後に顕宗天皇が早世すると、翌仁賢元年(488年)億計王が40歳で即位、仁賢天皇となる。在位11年(498年)50歳で亡くなるまで良い政治をしたとされる。／貴種流離譚であり、大変稀有な兄弟愛の美談である<sup>(7)</sup>。

しもかわらが提示した「億計弘計の物語」も概略である以上、物語の全貌を説明しているということではできない。『古事記』や『播磨国風土記』に描かれた二皇子の物語は、細部において異同が少なからず見られる。また、『播磨国風土記』は二皇子と根日女にまつわる、まったく異なるエピソードを取っている。こうした事情も影響しているのだろうか、二皇子の物語は従来も多数の研究者が強い関心を寄せており、さまざまな主題を扱った多数の論文が発表されている。だが、本稿を進める上で必要不可欠な要素は、しもかわらによってほぼ網羅されていると思われる。遺漏している部分は以下の行論において適宜補足していきたい。

## 2 二皇子の物語における芸能

前節でも述べたとおり、二皇子の物語が芸能に彩られていることは、この物語がアニメというメディアとも高い親和性を持っていることを示唆しているはずである。だからこそ記紀・万葉に取材した短編アニメを制作して万葉文化館の展示に資することを最終的な目標として設定した共同研究に最もふさわしい素材であるとも考えられるのだが、ともかくこうした主題を扱った論文を取り上げながら、研究史を整理しておきたい。飯泉健司は『播磨国風土記』『日本書紀』『古事記』の三書に見られる「オケ・ヲケの播磨国逃避伝承」<sup>(8)</sup>を比較した論文において、二皇子が新室の宴において身分を名乗る部分に留意して、こう述べている。

オケ・ヲケ伝承の中核要素は名告り部分にあったのであろう。この名告りに関しては、従来芸能の様相を帯びているとの指摘がなされてきた。西條勉氏は「歌舞劇」を想定し、小嶋環禮氏は「『立出舞』の実演記録」とされた。また室寿詞章があることから、その担い手を、相磯貞三氏は「巡遊

伶人」とし、岡田精司氏は「巡り歩く芸能集団」とした。なお、尾畑喜一郎氏は、八重山地方の「アングアマ」との対比をとおして、「庭の芸能」「座敷の芸能」の古い姿を当該伝承に見出し、古代〈芸能=劇〉の発生契機を読みとろうとした<sup>9)</sup>。

飯泉自身は「このように芸能との関わりを想定するならば、当該伝承が大筋に共通しながらも、クライマックスの名告り部分の詞章が大幅に異なる点も理解しやすい。つまり演者が個性を発揮し、場に応じて工夫した。そのために各書は山場に独自性を持つに到ったのであろう。芸能における名告りを中心とした貴種流離譚が三所共通の伝承の核に存するものと考えられる。」<sup>10)</sup>という。あらためて飯泉が列挙した研究者の所説もくわしく見ておきたい。西條勉は「歌舞劇」を「歌謡と舞踊の複合する古代演劇」<sup>11)</sup>として定義した上で、こう述べている。

ヲケ王の「名告り」は、演劇的なかたちで行われたらしい痕跡を、いくつかとどめている。記紀ともに、これを新室の宴のときのこととするが、これは、演ぜられる場を反映したものであろう。書紀に伝えられる有名な「室寿詞」は、明らかに実際に唱せられた詞章である。物語的に机上でつくられたとは思われない。この詞章が、「室寿」「勸酒」「鹿の舞」の準で記載されているのは、祭の次第を忠実に追ったからであり、「勸酒」と「鹿の舞」は、むろん宴の部分に当たる。その祭宴の場に供せされたのが、ヲケ王の名告りの歌舞劇だったのであろう。新王の出現は劇的に行われ。火焼きの賤民に扮した歌舞者の〈ウターマヒ〉によって、場の時空は、連続する皇統の世界へと変容していく。当然、その場は、観者の存在を不可欠の要素として成り立っているわけであるから、変容する時空は、見る者のいる場所をも巻き込み、劇的な世界として、ともに体験されることになる。〈ウターマヒ〉によって捏造される皇統の連続は、体験され、生きられる世界である。／そこに、身体表現のもつ隠された魔性がある。火焼きの賤民から「僕らま」という「われ」への転換は、観客の体験する〈現在〉において生起し、その「われ」は、見る者とともに生きられる。〈ウターマヒ〉の露わにする潜在的な可能態とは、このように、集合的に共生される「われ」のことである。それは見る者の関与をぬきにしては成り立たない<sup>12)</sup>。

西條は「歌舞劇」にまつわる「見る／見られる」関係が二皇子の名乗りを成立させている構図を浮かび上がらせている。そうだとしたら、二皇子の物語を扱った短編アニメも、「火焼きの賤民から「僕らま」という「われ」への転換は、観客の体験する〈現在〉において生起し、その「われ」は、見る者とともに生きられる。」というような状況を生み出せるはずである。「変容する時空は、見る者のいる場所をも巻き込み、劇的な世界として、ともに体験されることになる。」という西條の所説は、あくまでも「歌舞劇」を想定している。だが、それはアニメが現代社会に生きる私たちにもたらす体験とも通底しているだろう。一方、小嶋瓊禮はこう述べている。

この二人の王子の物語は、新嘗の儀礼を基盤に成立した芸能として、伝承されてきたものではないかと考えられる。おそらく「立出舞」を中心にした演技で、それがオケ・ヲケ二王子の物語に由来すると伝えられていたのであろう。『日本書紀』に「立出舞」のくわしい記述があるように、朝廷やその周辺には、現実には「立出舞」が伝わっていたにちがいない。三つの文献で、物語の全体の構想がかなりよく共通していたのも、「舞詠」の芸能の型で、枠が定まっていたからであろう。／そうしたなかで注目されるのは、「舞詠」の名宣りの詞章が、三者三様に異なっていることである。歌謡など韻文的な詞章をともなう物語では、むしろ、その歌謡の部分に共通性が強く、他の物語の部分に差異が目立つのがふつうである。してみると、この詞章の差異の大きさは、かえって「詠辞」の特徴ではないかと考えられる。詞章の変化のしかたから推測すると、その言い立てるべき趣意と表現の形式だけがきまっていて、具体的には即興的に詞章を組み立てていたのかもしれない。／こ

の三書の素材は、直接は筆録された物語の資料かもしれない。しかし、こうした違いを生み出した元の材料は、つまりは「立出舞」の実演記録だったとみてよかろう。「詠辞」の言わんとするところはきわめて単純なのに、修飾語がさまざまに変化している。それは、いかに新鮮な詞章を綴るかに、演技の興味があったためであろう。「詠辞」が漢文表記になっていたのも、歌謡のように定型的な詞章そのものを伝えることを目的とせず、どのように唱えられていたかを記録するためであったからであろう<sup>(13)</sup>。

相磯貞三の所説も見ておきたい。相磯は室寿詞が「歌や祝言を唱えて、部落の間を流れ歩いた巡遊伶人に流伝したものである。」という。相磯はヲケノミコが演じた殊舞（立出舞）を「侏儒の物まね」<sup>(14)</sup>として理解しているから、巡遊伶人も西條がいう「歌舞劇」、つまり「歌謡と舞踊の複合する古代演劇」に従事する芸能者であるといっているだろう。岡田精司も相磯の所説に触発されつつも、「オケ・ヲケ兄弟大王の物語の背景には、歌謡や舞を含む芸能者の影がちらつくように思えてならない。」<sup>(15)</sup>と述べて、「巡り歩く芸能集団」を想定している。そして、「おそらく播磨と近江を中心に畿内周辺を語り物をもって歩く芸能者の一団が、七～八世紀の頃に存在したのではあるまいか。彼らの運んだ語り物は恐らく中間に唄をはさみ、簡単な振りをつけた舞も伴っていたものであろう。」<sup>(16)</sup>というのである。尾畑喜一郎はどうだろうか。

少なくとも二王の流離譚は劇的伝承に材を得たものであり。従つてそのまゝが歴史的事実ではなかつたのを考へる時、右の伝への背後には「庭の芸能」と「座敷の芸能」——主客転倒の様相の如きを、感得せずにはあられないやうである。更にいへば、斯かる「庭の芸能」の優勢は、精霊的演者に負はされた本質的な役割（前述）から推して見ても、極く自然の成行きといひ得るし、またそれは古代芸能の宿命であり、曲り角であつたといふふうにならざるにさへ理解される。つまりこの事は、精霊の縁起が神の演技を上廻り、圧倒して行くのを意味するが、古代〈芸能＝劇〉への一つの道筋、発生契機なるものも、実は斯ういつたところに存したと云ふことが出来る<sup>(17)</sup>。

尾畑は「古代劇的なものゝ重要支点といへる、見物——観客の問題に触れて見よう。」<sup>(18)</sup>と述べて、西條とも同じく「見る／見られる」関係に言及している。すなわち、「見物——観客なるものは、斯ういつた「招かれざる客」から分化し、昇華して来たといふふうには理解すべきであらう。芸能を見ようといふ意志的な働きかけがあつて、初めて、見物人なる概念が生じて来るのである。それは同時に劇的観念の芽生えとも無関係ではなかつた。斯様なわけで、私のいふ精霊的演者も一面、信仰的には未然形の見物とイメージを重ねることになるが、そこにも観客の存在を必須条件とする、古代〈芸能＝劇〉の発生の必然性といつたものが、垣間見られるのではなからうか。」<sup>(19)</sup>というのである。

そして、尾畑は「見物を措いて演劇は考へられず、また観客の為の古代劇的なものであるのを思へば、「招かれざる客」の持つ信仰的エネルギーが、聴て観客と演者の共通の場を持つやうになつたとしても、その筈であつたと云はねばなるまい。」<sup>(20)</sup>というのだが、二皇子の物語がそもそも「見る／見られる」関係によって紡ぎ出される場に支えられていたとしたら、二皇子の物語を短編アニメ化する試みによって現代の観客に提示することは、「見る／見られる」関係が入れ子構造として再帰的に反復されることを意味している。こうした構造は現代社会に生きる私たちが短編アニメを通して、二皇子の物語を内在的に体験することに少なからず貢献するはずである。

### 3 二皇子の物語における芸能・補遺

二皇子の物語が芸能に彩られていることは、飯泉が紹介した研究者の所説以外でも言及されている。尾畑喜一郎は前述した論文において、殊舞に関する興味深い所説を展開している。「先づ「殊舞」が侏

儒の誤りで、要するに侏儒舞、短人舞のことをいふのは、今日では認められたる通説といつてよい。同時に二王が、当時での推定年齢(三十歳前後か)とはうらはらに、わらは髪・かむる姿であられたらしいのも、短人舞と無関係であつたとは思へない。演技の場は、小楯等の宴席を望む庭の辺り——其処で精霊の舞が演ぜられたわけである。」<sup>(21)</sup>という。尾畑は別の論文において、「清寧記に「焼火少子二口竈傍」とある、焼火少子として竈に火を焚いてゐられた億計・弘計二皇子——「丹波小子」(顕宗紀)は、その実、小人舞をする小人でもあられたのである。」<sup>(22)</sup>とも述べている。

また、北郷美保は二皇子の実在性を想定した上で、物語が持つ特徴の一つとして「これらの伝承の中で二王が発見されて名乗り出る場面が宴の場での芸能の徒の姿を彷彿とさせること」をあげており、実際に「二王は“宴の席”で発見され“舞”を舞い“詠”をしている。『紀』によれば億計王の舞の後、弘計王の室寿、殊舞があり、『記』では兄王の舞の後、弟王の舞と詠がある。」<sup>(23)</sup>という。また、「「丹波の小子」という名前は「矮小の人物」を連想させる」といい、尾畑の所説に言及しながら「片目・盲・跛・小人であるといった身体的特徴は一種の霊能を持つ者の証であるとされ、歌舞演劇を職とする芸能民にはこれらの特徴を持つ者が多かったらしいのである。」とも述べて、「彼等が海辺を漂泊放浪する海部の民に混って種々の芸能や伝承を伝え歩いた」<sup>(24)</sup>可能性を示唆しているのである。

北郷は二皇子の物語が持つ特徴の一つとして、「忍海部について」もあげている。北郷は「『紀』によれば二王は播磨国赤石郡縮見の屯倉に身分を隠して仕えていたが、その屯倉の首が忍海部造細目であつた。」と述べて、「忍海一族は元来鉱物豊かな播磨あたりの海辺で砂鉄をもととした素朴な金属精錬を行なう人々であつたのであろう。それが、播磨が皇室勢力の傘下に入れられた後、その有する技術をもとめられ、大和に移住させられた。その後大和の地でより高度な金属精錬・鑄造技術を持つ帰化人と接触を持ち、それによって一段と合理的で能率的な家事技術を有する一族に成長した。」とも推測している。そして、「二王逃避の伝承は元来忍海氏が持っていた単なる芸能民の流浪伝承だつたものと思う。」<sup>(25)</sup>というのである。

一方、北郷は「二王発見の場面は『記・紀』『播磨国風土記』いずれにおいても宴会の席であり、しかもその宴会は大嘗祭を思わせるものであつた。」<sup>(26)</sup>ことを指摘した上で、倉林正次が大嘗祭における芸能を取り上げた論文において「「湯立」の歌は、磯良が崎という地名、海人に関係ふかい伊勢を出している点など、神楽が海部系統の芸能である証拠の一つに挙げられる。」が、「この本末の歌の各々には、「おけおけ」の語が囃詞風にくつついている。」といい、「神楽は本来阿曇の神の資格で行うものであり、その神は精霊的性格を有する神であつたから「あちめあちめ」とはやしたてた。」後、「この呼び立てに対して「おけおけ」「おゝ」などの呼応の声があり、喚声があつた。」<sup>(27)</sup>と述べたことに触発されて、こう続けている。

兄王の名“オケ”がこの囃詞からきたものだと断定は出来ないが、二王共に一風かわつた“オケ”と“ヲケ”という名を負っているのは妙である。両天皇が兄弟であることを強調する為に、“オケ”とその弟であることをあらわす“ヲケ”の名前にしたものかとも考えられるが、もともと二王発見の場面は大嘗祭で種々の芸能が披露されるその模様を伝える伝承である為に、伝承の中で囃詞としてくり返される「おけおけ」が兄の意祁王の名のりに転用されたのではないかと考えられるのである<sup>(28)</sup>。

北郷の所説は推測が少なからず含まれている。だが、オケとヲケという名前に関する仮説は魅力的である。じっさい、「おけ」は神楽歌や催馬楽における囃子詞として登場する。神楽歌は「阿知女法」「榊」「早歌」の最後で発声される。また、「湯立歌」でも本方が「伊勢島の海人の刀禰らがたく火のけおけおけ」と歌い末方が「たく火のけ磯良が崎にかをりあふおけおけ」と歌う1首、本方が「大君のゆきとる山の若桜おけおけ」と歌い末方が「若桜とりに我行く舟楫棹人貸せおけ

おけ」と歌う 1 首が知られている。一方、催馬楽は 2 曲が知られている。「飛鳥井」が「飛鳥井に宿りはすべし や おけ 陰もよし 御水も寒し 御稜もよし」、「青柳」が「青柳を 片糸に縋りてや おけや 鶯の おけや」と歌われるのである。

オケの意味は不明であるが、木村紀子は『古語拾遺』を引用しながら、「オケのケとは木のこと、すなわち拍子木を打つ代わりの口拍子(木)ではないだろうか。大相撲などで、開始や終了を告げて拍子木を打つことを今でも「木が入る」などと言っているが、催馬楽以外ではオケは「了り」を告げる声でもあり、何程か関連があるように思われる。」<sup>(29)</sup>という。名前といえば、ヲケの別名である来目稚子にも芸能の痕跡が刻み込まれている。来目稚子という名前は、久米歌や久米舞を保持する久米部(来目部とも書く)をしのばせる。久米歌や久米舞は早く王権に服属した古代の久米一族が伝承した歌舞であると考えられており、二皇子の物語にこうした芸能が投影されていたとしてもおかしくないだろう。山尾幸久はこう述べている。

二王が辺地を流浪したかのように見える紀や風土記の記述は、兄を「鳥稚子」、弟を「来目稚子」とするその名と不可分の、神仙説による物語の変形形と思われる。まず、万葉集によって、摂津の姫島の松原や紀伊の美保の岩屋にまつわる伝承をもつ、当時人口に膾炙していたクメノワクゴの口碑があったことがわかるが、これは顕宗天皇でないのはもとより“久米氏の若者”とか“久米氏の貴子”というだけでも不十分であって、必ずや洞窟での新鮮の修業や松原での仙女の羽衣にまつわる話をもつ、久米集団とのゆかりが深い神仙としての久米の若者であろう<sup>(30)</sup>。

『万葉集』は博通法師が「紀伊国に往きて、三穂の石室を見て、久米の若子がいたという昔日をしのび、「はだ薄久米の若子が座しける三穂の石室は見れど飽かぬかも」とも「常磐なる石室は今もありけれど住みける人そ常になかりける」とも詠ったことを記録している。三穂の石室は和歌山県日高郡美浜町三尾の岩屋であると考えられている。当然ながら志染の石室を連想させるのだが、中西進は「久米の若子と称する主人公の流離伝説が各地にあったろう。その一つが、顕宗天皇に結びついている。」<sup>(31)</sup>といい、「各地に流布した伝説とも見えるが、より基本的には流竄を性格とするのが「久米の若子」のあり方だったのではあるまいか。」<sup>(32)</sup>とすらしい。

三浦佑之も二皇子の物語が持つ話型の伝承性を論じた論文において、中西の所説に導かれながら「久米の若子に関わる伝承が広く流布し、それがヲケ王と結ばれて伝えられていたということは確かだといえそうである。」<sup>(33)</sup>というが、あらためて山尾の所説に戻りたい。山尾は「顕宗の一名「来目稚子」が久米仙人の原形の名とすれば、仁賢の一名「鳥稚子」は浦島太郎の原形の名であろう。」<sup>(34)</sup>とも述べている。そして、「顕宗・仁賢の即位伝承は、播磨の志深で飼丁をしていた二少年が、身分の劇的逆転によって天皇になったという大筒・小筒の王胤出現譚を基本とするが、発展形では鳥稚子・来目稚子の著名な神仙が結び付き、興趣溢れる貴種流離譚に仕立てられた、全体としては芸能的な一種の虚構であろうと思われる。」<sup>(35)</sup>というのである。ここでも尾畑の所説が補助線として有益である。

こゝで久米の若子を狙上のにせて見ることにする。先づ、侏儒の尊崇神と看做される少彦名命の別名、久米能若子を筆頭に、小人の印象を焼きつける「丹波小人」の一人、弘計王も久米稚子と称せられた。(中略)久米のわくごなる襲名伝承は、それが汎称通名であつたことを示教してやまない。とりわけ前に社に焦点を合せるなら、古く久米氏にわくごを自称する芸能の徒輩——侏儒の俳優人がるたやに想像しても、強ち無理な推論と破棄する訣にはゆくまい<sup>(36)</sup>。

尾畑は「鎮魂の歌舞を以て奉仕した久米部の連衆が、古代芸能として〈久米舞〉を演ずるとなれば、(中略)霊的な存在態——演技者の登場は必至であつたと見ねばなるまい。然してその俳優人こそ侏儒であつたと解して、大過ないのではなからうか。」<sup>(37)</sup>という。当時の久米舞がどのような芸態を持っていた



のか不明である以上、こうした推測が大過ないかどうか判断することは難しいが、想像を掻き立てる興味深い所説であるといえるだろう。そして、中西は二皇子の物語を美談として知らしめる「互譲の理由としてあげられるのは、舞によって名を明かしたという事実である。これは実は久米舞を舞ったのではなかったろうか。この流離行には、ちゃんと張内を伴ってはいるが、袁祁が久米部を伴って逃れ、久米部が世襲の舞によって王子の運命を開いたという想像は、空想にすぎるであろうか。」<sup>(38)</sup>とすらいうのである。

だが、想像をこれ以上膨らませすぎることは禁欲して、二皇子の物語を個別的な場所に着地させてみたい。長野一雄は『播磨国風土記』における「たらちし 吉備の鉄の 狭鉄持ち 田打つ如す 手拍て子等 吾は舞ひせむ」という詠辞について、「播磨に近い吉備の鉄と、それをもつての労働を歌いこめているのは、いかにも在地の民謡とみられる。」<sup>(39)</sup>という。また、大久間喜一郎も「民謡風の歌句である。或は播磨の国に伝承された土着の歌謡を採用したものかも知れぬ。」<sup>(40)</sup>という。

一方、兼岡理恵は『播磨国風土記』における詠辞が「ウタではないと位置づけられつつ、特別な発声をもつ名告りの詞章」<sup>(41)</sup>であると述べて、「オケ・ヲケの「詠辞」が、そこに複数掲げられる地名が孕む叙事—「地域性」を生かした詞章であることを考察して」<sup>(42)</sup>いる。じっさい、二皇子の物語は個別的な場所によっても彩られている。したがって、次節は播磨と丹波に点在する二皇子を祀る神社を概観しながら、二皇子の物語が個別的な場所に結びつけられることによって、現代社会においてもn次創作される素地を獲得している消息を取り上げておきたい。

#### 4 二皇子を祀る播磨の神社

二皇子ゆかりの地といったら、やはり志染の石室だろう。二皇子が隠れていたという志染の石室は『日本書紀』や『播磨国風土記』でも言及されているが、今日でも兵庫県三木市兵庫県三木市志染町窟屋に存在している。私が出かけた平成30年(2018)10月13日は、平成30年7月豪雨によって整備された山道が歩けない状態だったらしく、志染の石室駐車場に接した入口に「崩落危険 立入禁止」を告知する掲示物が置かれていた。やむを得ず反対側に位置する兵庫県三木総合防災公園を通り抜けて、ようやくたどりついた。

石室は高さ2.7m、幅14.5m、奥行き7.2m、谷に面した崖の下部が洞窟状に深く抉られている。手前に玉垣が配されており、その内側に小さな祠が祀られていた。また、向かって左脇は10数体の石仏が祀られていた。石室の内部は湧き水が溜まっている。豪雨が影響していたのだろうか、訪問したさいは水も濁っていた。だが、この水は湧き水であり、ヒカリモが作用することによって12月下旬～3月初旬に水面が金色に輝くという現象が時々見られるらしく、窟屋の金水と呼ばれている。といっても、『播磨国風土記』は二皇子が隠れていたというのだから、水も当時は溜まっていなかったのだろうか。

田中久夫は金水という名称の由来について、「それは石室の奥が金色に光るということもあるが、忍海部細目が食えなくなるとこの石室を掘るとよいといいのこしたという伝説があるからでもあった。」<sup>(43)</sup>という。田中は「細目(元和田村)には両皇子が牛飼、馬飼としてやとわれていた忍海部造細目の子孫といわれる忍海辺氏が今に住んでおられる。」とも書いており、少なからず驚かされる。「細目(元和田村)」というのは現在の三木市志染町である。田中が聞き取った「忍海辺氏のお話」<sup>(44)</sup>を紹介しておきたい。

忍海辺氏は四軒しかない。それは分家には屋号の寺屋姓を与え、忍海辺を名乗らせなかったからである。家のすぐ南の前の山には大歳神社がある。神社の下の田は本殿堂といい。黒木の御殿のあとと伝えられている。これは両皇子が名乗られて後に建立されたものである。さらに、この本殿堂に

も金の鳥が埋めてあるという伝説がある。そして、小楯が両皇子を迎えに兵を押し立てて来た所を押部といった（西区押部谷町）、また、二皇子が丹波から逃げてきたその途中には、大歳神社がある。それは必ず二カ所ずつである。西大歳に対し東大歳、南大歳に対し北大歳といった具合にである。大歳神社は丹波と播磨にあるのはこの理由によるとというのが忍海辺氏のお話である。さらに、ここには両皇子の祖父、履中天皇が国見をした所と伝える場所がある。高男寺（地名）である。従って高男寺の燈籠の所から中村の山の上まで一直線上だけは家を建ててはいけぬ。建てると家に「ふじ」が起るといふ<sup>(45)</sup>。

また、福本錦嶺は「三木の地にのこる伝説」として、「この三木市志染町吉田に高宮というものがあつたといわれています。これは二王子の仮宮が建つていたところと言われていふ。また仮宮を建てて、お迎えしたところが皇垣内であつたともいわれ、久しく留まつたことから、久留美村の地名ができたともいわれていて、二王子の住んでいた行宮が移動したようにも思われます。／そのほかに別所町の下石野というところに王子神社というものがあつて、二人の王子がこの神社にお祈りをして、その後天皇になられたという伝承があります。／この三木の地は、このような伝承が散らばつていて、大変古い時代から皇室と関係の深い土地であつたように伝えられています。」<sup>(46)</sup>といふ。

現在は志染の石室と窟屋の金水に関する2種類の解説板が設置されているのみならず、志染の石室駐車場にも案内板や公衆トイレが設置されており、聖地を見学する環境が整備されている印象を受けた。二皇子の物語は志染の岩室という空間的な支点を獲得することによってn次創作されているともいえるだろうか。じっさい、志染の石室に二皇子の物語が付与されている消息は、『三木市立みき歴史資料館常設展示図録』の第2節「古墳時代の三木」においても紹介されているのである<sup>(47)</sup>。飯泉は「日本書紀で石室が従者の自害地となっていることからすれば、風土記では積極的に神秘的な石室を伝承に取り込もうとしていたことがわかる。」<sup>(48)</sup>と述べた上で、こう続けている。

現在のシジミの岩屋は、岸壁から湧水が滴り落ちる地であり人が隠ることはできない。この石室に神出現の信仰があつたか否かは不明だが、二王が隠る地として伝承上捉え返された土地である。土地側の規制を逆に利用して、土地の特性を正の方向で生かそうとしている。このことは、自身の土地を中心として発想する、土地主体意識の規制を受けているものであつて、完全に自由な創作が出来ない状態に作成者が置かれていたことを物語っている<sup>(49)</sup>。

二皇子の物語を個別的な場所に結びつけながらn次制作する過程は、おそらく飯泉が指摘しているような中間的な状態においてこそ、大きな成果を生み出したはずである。しかも、それは短編アニメを制作して万葉文化館の展示に資することをめざした共同研究の方法とも少なからず重なる。私は志染の石室を訪問した後、神戸市西区押部谷町木津に鎮座する顕宗仁賢神社に移動した。この日は秋祭りの宵宮であり、子ども歌舞伎などが奉納された。顕宗仁賢神社は顕宗天皇と仁賢天皇が祭神であり、柴垣宮跡に創建されたといわれる。こうした故事にちなみ、現在も石段途中の右側に柴垣が設けられている。また、社殿の左右にオケ・ヲケを描いた2種類の絵馬が掲げられている。「顕宗仁賢神社の由来」が社殿の右端に掲げられた額に記されており、右側の絵馬にも言及しているので、全文を紹介しておきたい。

顕宗仁賢神社の御祭神は十七代履中天皇の御孫にあられる億計、弘計の二皇子、後に天皇の御位に即かれた顕宗天皇と仁賢天皇の御二柱である。二王子の御父市辺押磐皇子が皇位継承の紛争にまきこまれて雄略天皇にほろぼされた為に難を避けて播磨国赤石郡縮見屯首、忍海部造細目の家に丹波の子といつわつて使用人となった。二王子は身分の明らかになることを恐れ、唾のまねをして火たき水くみ糶りなど炎暑慣例をいとわす働いた。この絵は二王子が細目に仕えて牛を飼ひ糶を刈るさまを画いたものである。／やがて雄略天皇はなくなられ、御子清寧天皇がみ位に即かれた

が、この天皇は御子がなく、皇位を継ぐべき人を探し求められた。清寧天皇の二年播磨国司山部連野遠祖伊予来目部小楯が新嘗の供物を整えるため たまたま細目の家に来たところ新しい家を建て、新室賀をしているところであった。この宴の時二王子は歌に託して身分を自ら明らかにされた。／これを聞いた小楯は里人を集めて大急ぎ仮宮を造り二王子の御殿とした。これが柴垣宮の起源であり、今も神社の一部に柴垣を編んでその遺風を伝えている。小楯は都にのぼり委細を奏上したところ、清寧天皇は大いに喜ばれ、すぐ二王子を都に迎えて世継とせられた。／この二王子ゆかりの地に仁賢天皇十一年戊寅九月二十三日勅を受けて創建せられたのが 顕宗仁賢神社で、以来、千四百七十余年間、ご神意を仰ぎつゝ、氏子の人々の篤い祈りが捧げられている。

右側の絵馬は二皇子が身分を隠して、細目の使用人として牛を飼い秣を刈る様子を描いているというのである。といっても、実際は1人が牛の背中に乗り1人が鎌を持つ手を休めて横笛を吹いており、無邪気に遊んでいるとしか思われぬのだが。もちろん「顕宗仁賢神社の由来」は二皇子が「身分の明らかになることを恐れ、唾のまねをして 火たき水くみ秣かりなど炎暑慣例をいとわす働いた。」ことを記している。だが、絵馬の制作者は二皇子の物語をn次創作するさい、艱難辛苦を経験する貴種として造形するよりも、二皇子に牛を乗りこなしたり笛を吹いたりする芸能者の面影を汲み取ったのかもしれない。

一方、左側の絵馬は二皇子が身分を明かして都に戻る様子を描いていると思われるが、輿に乗っている人物は首飾りを付けた1人だけである。顔は輿に付された布で隠されている。輿は天皇が略儀の行幸で用いる葱花輦であるから、これが先に皇位を継いだヲケノミコ、つまり顕宗天皇だろう。だが、オケノミコはどこにいるのだろうか。首飾りを付けた人物がもう1人だけいる。最後尾を歩く人物がやはり首飾りを付けており、剣をどちらかといえば無造作に片手に携えている。これがオケノミコだろう。その直前に剣を恭しく両手で捧げ持ち、しかも素手で触れることを避けているのだろうか、剣を両袖で包み持ちながら歩く人物がいるが、これはヲケノミコの剣を預かっている従者であると思われる。田中は顕宗仁賢神社についても興味深い伝承を紹介している。

押部谷町木津には顕宗仁賢神社が祭祀されている。木幡・木見・木津三村のお宮である。この神社には菊の紋のある軒平瓦があり天皇家との関係を伝えているのである。そして、木幡には細目の屋敷跡、細目の井があり、木津の真言宗正明寺には細目家の先祖の位牌がある。木津村は谷の一番奥にある村である。この谷をつききると鈴蘭台を経て神戸へぬける。この押部谷こそ忍海部細目の所と主張しているのである。／さて、ここにも次のような話を伝えている。細目にオトコシとして使われていた顕宗仁賢天皇が牛を追い神戸の方へいつも越えて行かれていた。その途中休まれていた所が今の顕宗仁賢神社である。天皇は角力が好きであったといい、三月九日と十月三日の祭りには、今も子供の角力がある。そしてこのお宮の霊験はなほだ高く近隣にも知られているという。例えば子供にクサが出来たら牛にかぶってもらったらなおるといい、「エンマ(絵馬)をあげますからクサをなおして下さい」と願うというものである。さらに、境内末社に杵の宮さんといい胃の病気によく聞いてくれる神さんが祀られている。神さんから小さな杵を借りてそれで悪い所をさするとなおるといふ。治癒すれば杵を倍にして返却するのである。どこまでも顕宗仁賢神社のお話は病気と関係する話であった<sup>(50)</sup>。

だが、田中は「江戸時代には現在の志染に両皇子の話が伝承されていたのであって、押部谷にはなかったのである。」といい、顕宗仁賢神社の伝説が成立した経緯を推測している。すなわち、「赤石郡(明石市)は奈良、平安時代の初期頃より疫癘統御神である牛頭天王信仰が大変盛んな所であり、「この信仰のあるところへ顕宗・仁賢天皇の話が押部谷との関係で入りこんできた。牛頭天王も天皇も庶民に

としては区別がつかなかった。これが顕宗仁賢神社の創立に結びついたのであった。」と述べている。それは「遅くとも江戸時代に入ってからのことであった。それというのも、『播磨鑑』は押部の項で「億計弘計二王と押部」という項目をあげながら顕宗仁賢神社の事にふれていないからである。」<sup>(51)</sup>という。『播磨鑑』は平野庸脩が長い年月をかけて完成させた江戸時代の地誌であり、宝暦 12 年（1762）の自序が付されている。田中はこう続けている。

このように顕宗仁賢神社がもと牛頭天王を祭神とするものであったと考えてはじめて、顕宗仁賢神社が「かさ」によくきく神であるという伝承も理解出来るというものである。「かさ」には天然痘があってもよいからである。牛飼いの子が天然痘にかからぬという信仰を、また姫路の国分寺の縁起に見ることが出来る（『播磨鑑』所収）。そして、細目の井、細目の家が谷の出口にあたる押部谷町の木幡に求められていったということになる。このように、顕宗天皇仁賢天皇と関係づけられた神社は、当然ながら明石に分布を見ることになる。牛頭天王信仰は明石で生れたと考えられるからである<sup>(52)</sup>。

いずれにしても、田中は「押部谷町の顕宗仁賢神社は牛頭天王信仰の上に展開した話ではなかったか」<sup>(53)</sup>というのである。天皇と天王は文字として近似しており、音声として一致していた。田中の所説は二皇子の物語が牛頭天王信仰に重ね合わされた上で個別的な場所に結びつけられることによって、江戸時代以降に n 次創作されていった消息を鮮明に浮かび上がらせている。顕宗仁賢神社の伝説もこうした n 次創作の好例であったというわけである。そして、前述した 2 種類の絵馬は二皇子の物語を視覚化するという意味において、n 次創作を推進する効果的な方法であったと考えられるだろう。

ところで、喜多慶治は公開された調査ノート<sup>(54)</sup>において、顕宗仁賢神社の宮座が「明石川の流域全般に伝承されているオケ、ヲケ 2 神を祖とする。この地方の株座的性質を帯びた宮座のコウゾウ（講当？講幣と書く）である。木津部落の草分けと称する 36 軒（もとは 38 軒）で守られている株座で、長男への世襲であった。」ことを報告した上で、「講ぞうは正月の日と 9 月 12 日と、いずれも午後 2 時頃から行われる。糯を白蒸にして、出来上がった所でまづ、最初に御供 2 桶をとる。残りを 88 組の鏡餅に搗く。外に掛鯛（いまわすめ）及び天の魚を造る。掛鯛も天の魚も、もとは明石鯛を用いたが今はすめ及びイカを使う。」という。そして、1 月 2 日に行なわれる正月の講ぞうについて、こう述べていた。

白蒸の御供、桶 2、掛鯛 2 対、（掛鯛は 2 尾の鯛を新藁のアマナイ縄で吊るすようにして、先端を結んでつるす。これを顕宗、仁賢の 2 対造る）天の魚 1 ケ（新藁を並べてアラカミにし、丁度竹の川を拵げたようなものに、鯛のをせる。これは実物を見ていない。実物はイカを輪切にしたものをたくさん並べてあって葉の両端は東にしばり上に折りまげて中央で結ぶ。結んだ所をさげて運ぶが、直会するとき、亭主が神前から下げて、客に酒の肴として廻す）。

調査ノートは詳細にわたっており、この後も長く続いているが、「2 尾の鯛を新藁のアマナイ縄で吊るすようにして、先端を結んでつるす」した掛鯛を「顕宗、仁賢の 2 対造る」ことに留意しておきたい。喜多は昭和 39 年（1964）9 月 12 日に秋の講ぞうを調査している。秋の講ぞうが今日でも実施されているかどうか確認しなかったことが悔やまれるのだが、二皇子の物語は絵馬としてのみならず、祭祀においても視覚化されていたのである。二皇子の物語を祭祀において視覚化する事例は、他にもいくつか確認することができる。第 7 節でくわしく後述するが、喜多は「年 2 回の講ぞうの他に顕宗仁賢神社では 3 月 9 日（ハルタチ）と秋祭り（10 月 22、3 日）をやる。これをシューシ（衆詞）という。」とも書いており、私が出かけた秋祭りの宵宮にも簡単に触れていた。

秋のしゅうし（秋祭）は 10 月 22～3 日であるが本年から、農家の忙しいときなので 20 日早くして 10 月 2、3 日にやるという。このときは古い大事に蔵ってある大提灯を宵宮に出すという。／昔は、

そのとき舞台上で素人芝居をやった。現在の舞台は棟札によれば昭和10年の建立、中心突上式の廻舞台付で、両袖に囃子方席があり、上手花道も斜にあった。葡萄棚なども現存する。

私が見た子ども歌舞伎は神戸農村歌舞伎保存会の会長を務める加藤直子さんが指導しており、神戸市西区の子どもたちが演じていた。演目は「勸進帳」であり、子どもたちは見事に舞台を務めていた。これはかつて演じられていた素人芝居の伝統を復活させたともいえるだろうが、願わくば二皇子の物語を舞台化していただきたい。あれやこれや思料するのだが、私は歌舞伎にこだわっているわけでも何でもない。もちろん顕宗仁賢神社の場合だったら歌舞伎が最もふさわしいと思われるが、二皇子の物語を舞台化する試みは、さまざまな可能性に向けて開かれているはずである。それは観客に二皇子の物語を体感してもらうという意味において、n次創作を推進する有力な方法であったと考えられるので、第9節であらためて論じてみたい。

## 5 二皇子を祀る播磨の神社・承前

私はその日、顕宗仁賢神社に奉納された子ども歌舞伎を満喫した後、明石市に移動して1泊した。そして、翌7月14日は田中のもう一つの論文「顕宗仁賢天皇神社の分布とその背景」<sup>(55)</sup>に導かれながら、明石市内に点在している二皇子を祀る神社を回ったのである。早朝に明石市西新町の王子神社に向かった。社殿の左扉に1週間後の10月20日と21日に秋大祭が斎行されることを告知するポスターが貼られており、社殿の内部は神輿が出されていた。社殿の右側に掲げられた「王子神社の由来」はこう書かれている。

当神社は人皇第二十三代顕宗天皇二十四代仁賢天皇並二岩屋大神、伊弉册大神（御分霊）を齊る宮にして、顕宗仁賢両天皇は皇位継承につき、父君が御災厄に会われ、為に御幼少の二王子は、類難を慮り、東播磨の地に潜入せられ、名を匿し住居を転々としてあらゆる辛苦を嘗められ給い、最後後、王子村の細目家に寄遇せらる、第二十二代清寧天皇は皇子なく（皇紀一一四一年）に王子を探し求められ、迎へられ嗣となす、両帝は聡明仁恕にして久しく民間に在りて、下情に通ぜられし為、民其の業に安んじ国運隆盛を極む、民其の御治蹟と御生涯を称へ奉りて宮を建て報本及始の礼を尽す。

田中は西新町の宗賢神社以外にもかつての明石郡において二皇子を祀る神社を12例あげている。それでも全部は網羅していないようだが、「その創建年代は、全体的にきわめて新しいことに気づかされるであろう。江戸時代も遠く遡ることはない。そしてさらにそれぞれの神社の勧請次第がわかるのである。」<sup>(56)</sup>と述べる。そして、「明石市近郊の宗賢神社のほとんどが現在の西新町にある王子神社からの勧請であった」のみならず、「この系列の神社が、もと、王子権現とよんでいたものを、明治になって、現在の社名に変更した」<sup>(57)</sup>ことも指摘している。

しかも、田中は「王子村の王子権現こそ、この付近の王子社（宗賢神社）の中心であり、「これが特に、明治になって、政府による由緒取調のことがあり、王子を億計、弘計の両王子と結びつけ、顕宗・仁賢天皇を祀る神社としたのであろう。」<sup>(58)</sup>というのである。皇子と王子は文字として近似しており、音声として一致していた。したがって、二皇子の物語は江戸時代に遡るまでもなく、明治時代に王子村の王子権現という個別的な場所に結びつけられることによってこそ、n次創作されていったともいえるだろう。

幼少期を明石ですごした稲垣足穂は西新町にも言及しており、西新町に関連する二皇子の伝説を紹介している。稲垣は「橋を渡って少し先から西北に走っている、横丁の全くない長い通りが王子のくるわである。「西新町」というが、これを何か落付かない名だと受取るのは私ばかりではなかろう。」と述べた上で、「王子廓とは、オケ・ヲケの二王子が牛飼いをしながら時節到来を待った所だという伝説にも

とづいている。」という。そして、「兄弟が大和朝倉のみやこを逃れ、赤石の郡にきた時、伴人の日下部のむらじは絶望の余り岩窟の奥で首をくくってしまった。王子たちはそれから縮見の長、細目の奴隷になったが、時には休暇を貰って赤石の浜へ出て魚を獲ることがあった。其時の休息所が此処であった。」<sup>(59)</sup>ともいうのである。

しかも、稲垣はこう続けている。「王子権現(宗賢神社)が北王子にあって、旅人からは草鞋が供えられた。鶇外の「山椒太夫」を想わせるエピソードで、ミュージックとバレエが眼目になっているから、歌劇にはもってこいだ。しかし主人公たちはあとでミカドになるから、当世向きとはいえない。」<sup>(60)</sup>。というのだが、ここにも芸能者の面影が揺曳していることは興味深い。私も西新町の王子神社を出て、「王子神社御祭礼」という文字が染め抜かれた幟が何本も道中に立てられている様子を眺めながら、北王子町の宗賢神社に向かった。『明石郷土史』はこの宗賢神社にまつわる二皇子の伝説について、こう述べている。

或時は押部の山に山獵に又折には明石の浜に魚漁にでかけになり其節お休みの跡を後世王子村と呼ぶ。其後二十余年を経たる時当時の播磨の国司小楯都よりの帰途細目の許に旅宿し其時新室を建て移宅の祝宴を開きし時なり。国司の所望により此二小子(両王子)舞給ひ此時の歌により王子なることを知り国司此事を都に奏聞し時の清寧天皇驚き喜ばせ給ひ勅使を下青蓋の車にて都へ迎はせ給ふ。後二王子相次ぎて御位に登らせ給ふ。かゝる由縁により此地を王子村と名付けて一社を建立して両天皇を祀り奉る。両王子此地に使い給ひし時御足甚しく痛み給ひけるを村人いたはり奉りてやはらかき草鞋を造りて奉りければ甚だしく喜ばせ給ひ後皇位に登らせ給ひて村民を褒賞し給ひしと伝へらる。今猶旅行する人当社に参詣し無難を祈り草鞋を奉納すると云ふ。現在の王寺村の細目氏は造の細目氏の子孫とつたへらる<sup>(61)</sup>。

だが、かつて北王子町に鎮座していた宗賢神社は移転していた。実はその移転先こそが西新町の王子神社だったのである。私が見かけた幟が西新町一丁目北町内会のみならず王子町自治会によっても立てられていたのは、おそらくこうした事情に由来している。『播磨鑑』における「王子村」の項目は「古村ヲ古王子村ト合ス 有地神王子権現之森故号ス」というが、この王子権現も稲垣が「王子権現(宗賢神社)が北王子にあって」というとおり、北王子町に鎮座していた宗賢神社を意味しているのだろう。同書は「古市辺押磐王ノ二子億計 弘計ノ二皇子暫ク此所二居玉フ処ナルユヘ名トストモ云」という「俗伝」を紹介している。

宗賢神社跡の鳥居に掛けられた額東は宗賢神社という文字が記されているが、比較的新しい。一方、境内に残された狛犬の足元に石製の額東が立てかけてあり、やはり宗賢神社という文字が記されているが、こちらは大きく割れてしまっている。社殿を取り壊したさい破損したのだろうか。境内の左側は白龍大明神の社殿が建っており、右側は宗賢神社旧跡という文字が刻まれた大きな石碑が建てられていた。石碑の前に小さな祠が置かれており、神饌も供えられていた。合祀先である王子神社の秋大祭が近いせいか、石碑の左右に提灯が取り付けられており、台座のみならず鳥居にも幕が掛けられていた。石碑の背面はこう書かれている。

王子宗賢神社者昭和二十年十月因大水害流失社屋荒廢為甚敷西  
新町王子町連合町内会相寄計再建依御神慮西王子町一丁目求安  
泰御神域造営御社殿守護神此地奉御遷座通称王子神社尊号於此  
善郷人達相謀偲御神徳旧跡永久為保存碑建之

昭和三十七年十月吉辰

宗賢神社は昭和20年(1945)10月、大水害によって社殿を流失して荒廢したため、王子神社に遷座

したというのである。宗賢神社跡は境内の一角に腰掛石が据えられている。私が出かけた時は保護するためだろうか、ビニールシートが掛けられていた。偶然にも目の前に住むという女性が参拝しておられたので、尋ねてみたところ、この腰掛石は二皇子が休息した石であると伝えられているということだった。田中は「牛を追っていく途中で休んだ所が、ニカ所も残っている。」といい、顕宗仁賢神社のみならず明石市西新町の宗賢神社をもあげていたが、これも北王子町に鎮座していた宗賢神社だと思われる。少しばかり紛らわしいが、正確を期するならば、以前は北王子町に鎮座していたが現在は西新町に移転して王子神社に改称された宗賢神社というのが適切だろう。

私は明石市大和田町西脇に鎮座する宗賢神社と明石市魚住町長坂寺に鎮座する宗賢神社にも足を延ばした。『兵庫県社誌』は前者が延宝9年(1681)に後者を分霊して勧請したことを報告しているが<sup>(62)</sup>、後者についていえば「創立年月不詳従来王子権現と称せしも明治元年宗賢神社と改称し」<sup>(63)</sup>たという。また、田中は「同社の棟札には宝永三年(一七〇六)八月の創立と書かれている。」<sup>(64)</sup>という。

どちらも宗賢神社という社名だけであるが、顕宗天皇と仁賢天皇を一体化させており、二皇子の物語を前提している消息がしのばれる。明石において宗賢神社という社名を持つ神社は数多く存在しており、私が訪問したのはその一部でしかない。こうした事実も二皇子の物語が個別的な場所に結びつけられることによって、江戸時代以降にn次創作されてきた過程の一端を示唆しているはずである。二皇子の物語が江戸時代以降にn次創作されてきた過程の実際は依然として十分に解明されていない。だが、当面は田中が発表した論文に導かれながら、全体的な傾向を把握しておけばいいだろう。田中はこう推測している。

明石に『源氏物語』を読み、そしてその場所を求める知識階級がいたのであった。もちろん、明石には明石城があり、このことはあっても不思議ではないことであつた。／王子村の億計・弘計の二王子の話も、江戸時代の知識人によって伝えられていたということが想像される。ただ、この話がいつの頃、ここに語り伝えられたものかというのが問題ということになる<sup>(65)</sup>。

そういえば、飯泉も志染の石室が「二王が隠る地として伝承上捉え返された土地である。」<sup>(66)</sup>ことを指摘したさい、宗賢神社に関する田中の所説に言及しながら「土地の知恵者による伝承の再生産は、当該伝承での再解釈と通じるものがある。」<sup>(67)</sup>とも注記していた。本稿の関心に沿っていえば、後世における地元の知識人こそが二皇子の物語をn次創作する主体であったのかもしれない。そして、飯泉は「当該伝承の作成者は、文芸志向と、在地の規制との中間に身を置いている。二面性を持つのである。これを中途半端・未成熟と捉えてはなるまい。むしろ、土地の特性を生かしつつも、規制から逃れる術を模索する作成者の知恵を想起すべきであろう。この智恵こそが文芸的営為であつて、文芸を発生・展開させる原動力となっているのである。」<sup>(68)</sup>という。そうだとしたら、宗賢神社という社名自体にもn次創作という文芸的営為の萌芽を読み取ることができるはずである。

こうした視座に立脚した上で、あらためて冒頭で紹介した弘計皇子神社にも言及しておきたい。奈良県高市郡明日香村大字八釣に鎮座する弘計皇子神社は弘計皇子、後の顕宗天皇を祀る神社であるが、『高市郡誌』を見ても「当社創設の年代詳かならざれども、蓋し顕宗天皇近飛鳥八釣宮址の一部に建てたるものにして、顕宗天皇在位の御盛徳を万世に称へ、其の聖蹟を永遠に保存せんが為めに、爰に経営せしものたること明かなり。然れども記録の徴すべきものなく。沿革の詳かなる之を知ることは能はず。」<sup>(69)</sup>としか書かれていない。

「今境内に就きて考証に資すべき比較的古き物を挙げれば、元禄五年の寄進に係る石燈籠並に天保八年の棟札なりとす。されば当社の創建は元禄以前に在りしこと明かなりとす。社頭は大字八釣上の方に在りて西面し、境域小なれども高燥にして清雅なり。社地の東方に小溪流あり。古昔顕宗天皇曲水宴を

為し給ひし所と伝へたり。其の潺湲たる響きは今尚ほ賽客の襟を洗ひ、実に千歳の昔を偲ぶに堪へたり。」<sup>(70)</sup>というから、江戸時代に存在していたことは確実であるが、顕宗天皇が曲水の宴を開いたという伝承のみによって奈良時代に遡るわけにもいかないだろう。そもそも近飛鳥は現在の大阪府羽曳野市ともいわれており、そうだとしたら近飛鳥八釣宮をこの地に求めること自体、根も葉もない伝承として扱われてしまいかねないのである。

だが、『高市郡誌』は興味深い手がかりをも提供している。それは正遷宮に関する3枚の棟札である。天保8年(1837)の棟札は裏に「神主飛鳥土佐守」、嘉永7年(1854)の棟札は裏に「神主飛鳥榊太夫」、文久2年(1862)の棟札は裏に「齋主飛鳥榊太夫」という文字が書かれており、代々にわたって飛鳥坐神社の宮司を勤めてきた飛鳥家の神職が齋主として奉仕したことを知らせている。神職が地元の知識人として、とりわけ古典に関する十分な素養を持っていたことはまちがいないだろう。いつのころか飛鳥家の神職が『日本書紀』に登場する顕宗天皇の近飛鳥八釣宮を明日香村八釣に比定した可能性も少なくないだろう。阿部乾六はこう述べている。

顕宗の宮は継続年数が短く、所在地推定は深刻な論点とはならないであろうが、大和飛鳥であった可能性も充分残っている。その範囲内で考えてみると、飛鳥の中の八釣ということなろう。村民の大部分は河内飛鳥の存在を理解しつつも、顕宗の宮は高家の西麓の八釣に在ったと確信して居る。単に情緒的な身びいきからではなく、歴史学の推理法に基づいての結論として、と其の人達は言いたがっていると思う。端的に言えば、八釣の集落を通り抜け、高家に向かう道を少し登った台地状の辺り、畝傍、二上、葛城、三輪の山々に正対し、飛鳥盆地の大半を眼下に掌握し、高家、多武峰、冬野を経て吉野と交通しやすい地点こそ有力候補地なり、との強い主張を持っているに違いない。／と吸えば、その地を高く評価して宮地と定めた人を先覚者として仰ぎ、特別の尊敬と親愛の情を表わそうとして、神社という形態の施設を奉獻するに至ったのも、人情の自然の発露と見て良い。宮地の一角に建設された弘計皇子神社はそうした性格のものだったであろう<sup>(71)</sup>。

今日、八釣の住民は弘計皇子に対する関心をほぼ持ち合わせていないようである。私は八釣の方々に聞き取りを実施する機会が3回あった。平成30年(2018)7月26日に弘計皇子神社の氏子総代を勤める吉川豊弘さんにお話をうかがった上で、10月16日に弘計王子神社の秋祭り(宵宮)<sup>(72)</sup>の現地調査、平成31年(2019)1月14日に八釣の明神講<sup>(73)</sup>の現地調査を実施した。だが、八釣の方々は祭神である顕宗天皇に対してはほぼ無関心であり、二皇子の物語についても何か知っているというわけでもなさそうだった。明神講が藤原鎌足像の掛軸を掛けて勤められるためだろうが、弘計皇子よりもむしろ藤原鎌足を崇敬する心情が強く感じられたのである。

田中は神戸市西区榎谷町松本に鎮座する若宮神社も顕宗天皇と仁賢天皇を祀っているが、「榎谷村松本の若宮神社は、神社名からいっても顕宗天皇・仁賢天皇を祭神としている神社とは村人は考えておらず、その事蹟について関心も示していない。また、創立年代も時代がずれているので、村人たちは若宮神社と顕宗天皇・仁賢天皇とは別物であると考えていたらしい。何も両王子について語らない。むしろ、後述する光源氏との関係で語りたがる。」<sup>(74)</sup>という。藤原鎌足と光源氏の違いこそあっても、こうした状況は弘計皇子神社に関してもいえるようである。

## 6 祭祀における二皇子の物語

私は明石市魚住町に鎮座する清水神社に向かった。この日は清水神社の秋祭りだった。清水神社も顕宗天皇と仁賢天皇を祀っており、そもそも王子権現として王子村の王子権現を分霊して勧請された。前節に含めるべきところだが、清水神社は秋祭りにおいて興味深い囃子歌が存在している。以下は社殿に



掲げられた歌詞である。『兵庫県神社誌』中巻に収録された歌詞も若干異なっているが、ほぼ同一であった。囃子歌は1番～3番があり、1番が清水神社の由緒、2番が二皇子の物語、3番が楠正行の忠義を扱っている。

㊦清水神社と申するは 本体梵天帝釈天 其の神尊御事は 庚申の其の年に 青面金剛と天降り  
其後天照皇大神が 天の岩戸へ入らせ給ひし其の時に 猿田彦と顕れて 岩戸片手でサシタイ  
ナ 民のかまども賑へり 夫こそ誠に サア〜治った

㊦宗賢神社と申するは 市野辺皇子の実子なり 古播磨の押辺に 細目に仕へ牛を飼ひ 国司小  
楯に舞ひ歌とて 兄弟御名が現れて 小楯は驚きサシタイナ 後には顕宗仁賢と 夫こそ誠に  
サア〜御即位す

㊦楠左衛門正行は 父の遺訓を能く守り 朝敵足利尊氏を 討って叡慮を安めんと 明暮心を苦  
しめり 遂に正平戊子の春 吉野の皇居に参内し 心の内を奏上し 一族郎党諸共に 御醍醐邸  
に廟拝し 四条の囀でサシタイナ 興廢分目の大軍さ 夫こそ誠に サア〜勇ましい

大江篤が清水神社の秋祭りに関するくわしい報告を発表している。昭和57年(1982)に刊行されており、当時の状況を記録しているという意味でも有益であるので参照しておきたい。大江は「この神社は、最初西福寺の鎮守として創建された梵天帝釈宮が、明暦二年に大己貴命・顕宗天皇・仁賢天皇を勧請し、清水村の産神となり、明治初年に至って清水大明神と改め、清水神社として現在に至るのであった。そして、現在では、大己貴命・顕宗天皇・仁賢天皇を祭神とする。」<sup>(75)</sup>という。最初に宵宮(ヨミヤ)の手順を見ておきたい。

午後七時頃になると拍子木持ちが宮に入ってよいかどうかという許しを自治会長から得てからヤタイが正面の門から宮入りする。宮入りをするとヤタイは本社前、山上(行者堂)前、五社宮前の三ヶ所で、それぞれ「清水神社……」「楠木左衛門……」「宗賢神社……」と異なったはやしを唱える<sup>(76)</sup>。

「ヤタイは乗り子(太鼓)が十四、五才の子供(二十五、六人)、拍子木持ちが二十一才～二十五才の青年(五、六人)である。乗り子は四人一組で拍子木持ちの青年が子供たちを指導する。」<sup>(77)</sup>ものだったらしい。肝心の囃子歌についていえば、大江は乗り子と拍子木打ちが掛け合いで歌うこと、乗り子が上の句、拍子木打ちが下の句を担当することを記録している<sup>(78)</sup>。秋祭りの当日(ヒルミヤ)も手順は変わらない。「午後二時頃、ヤタイは宮入りをする。そして、ヨミヤと同様に、ヤタイが三ヶ所ではやし、次に舞台を引き出しジンジがある。最後にもう一度ヤタイはお旅所に向かう。」<sup>(79)</sup>というのである。

だが、私が実見した平成30年の様子は大きく異なっていた。屋台が本社前→行者堂前→五社宮前という順番で囃子歌を披露するのは変わらないが、屋台の中は無人であり、乗り子も太鼓も屋台の外に出されている。乗り子?の子どもたちは小学生の男女20人程度であり、囃子歌を担当している。拍子木持ちは従来どおりだったが、掛け合いの仕方が変わっていた。すなわち、屋台を担ぐ青年たちが囃子歌の上の句を歌い、子どもたちが下の句を歌っていた。やがて屋台は御旅所に向かい、御旅所の神事が終わったら神社に戻る。そして、最後に倉庫の前で囃子歌を披露するのである。

掛け合いの仕方は変わっていても、清水神社の秋祭りにおいて二皇子に取材した囃子歌が歌われていることは、二皇子の物語が祭祀において上演されているといってもいいだろう。清水神社は他にも二皇子の物語をn次創作した成果が残されている。それは昭和10年(1935)10月吉日に兵庫県立農工学校が奉納した「億計王弘計王出世之舞」という写真であり、額装されて社殿に飾られている。この写真の被写体は古代的な扮装を着用して舞う二人の愛らしい子どもの人形であり、二皇子が新室の宴において自分たちの身分を明かす様子を表わしていると思われる。二皇子の物語における最高潮とでもいうべき

場面が舞う人形として視覚化されているわけである。

一方、西新町に鎮座する王子神社の秋祭りは実見する機会を得ていないのだが、北王子町の宗賢神社跡で出会った女性に興味深い話を教えてもらった。すなわち、王子神社の秋祭りに二人の稚児が登場するのだが、それは二皇子、後の顕宗天皇と仁賢天皇を表わしているというのである。もちろん未確認情報の段階であり、はっきりしたことは何もいえないのだが、事実だとしたら二皇子の物語が祭祀の一部として視覚化されている好例であるということではできるだろう。また、田中は「王子町の宗賢神社も三木の方から明石へ二皇子が柴を売りにきて休んだ所だという。このため足が痛むとワラジを供えるとよいといい、秋祭りには大ワラジをあげていたという。」<sup>(80)</sup>と書いている。かつて北王子町に鎮座していた宗賢神社の秋祭りにも、二皇子の物語が大草鞋として視覚化されて挿入されていたのである。

二皇子を祀る神社を回る私の小さな旅はここで終わった。もちろん二皇子を祀る神社は田中が紹介した明石市内の 12 件以外に、三木市内にも数多く存在している。また、京都府にも二皇子を祀る神社がいくつか存在しており、二皇子の物語が祭祀に投影されている事例もいくつか確認されていることを知った。『日本書紀』は二皇子が従者に伴われて「難を丹波国の余社郡に避く。」と書いており、その後には播磨に入ったというのである。余社郡はかつての与謝郡に重なると思われるから、この一帯で二皇子の物語が語られているのもうなずける。やはり残念ながら実見する機会に恵まれていないので、文献に依拠するしかないのだが、管見した範囲で紹介しておきたい。いずれも二皇子を祭神として祀った上で、二皇子の物語を祭祀において視覚化することが試みられており、二皇子の物語を n 次創作する効果的な方法が提示されているようにも思われる。

初メ穴穂天皇（安康）皇子ナク従兄市辺押磐命ヲ太子タラシメントシ給ヒシニ皇弟大初瀬稚武命（雄略）之レヲ怨ミ、其ノ従弟眉和王ノ穴穂天皇ヲ弑シマツルノ変二事ヨセ市辺命ヲ蚊屋野ニ誘殺シ自ラ位ニ即キ給フ、帳内日下部使主市辺ノ遺子億計弘計ノ二王ヲ報ジテ難ヲ丹波ノ与佐郡ニサケ当地ノ御縁辺ニ御潜在アラセラル。俚民未ダ何方ニ在スルヤヲ知ラザルモ其ノ常人ニアラサルヲサシテ敬仰シ美味アレバ競ウテ進ム、然ルニ二王尚ホ御素性ノ露見ヲ慮ラレテ更ニ他ニ御潜在アラセラレントスルニ際リ俚民袂別ヲ惜シミ赤飯ヲ炊ギテ餞ニ捧ゲ一路其ノ御恙ナキヲ祈ル。後チ二王播磨ニ在マシ白髪広国天皇（清寧）ニ迎ヘラレ皇統ヲ継ガセラルルヲ伝ヘ聞キ俚民初メテ曩キノ漂客ガ高貴ノ方ナリシヲ知り敬仰ノ余リ社殿ヲ造営シテ二王（顕宗仁賢天皇）ノ御霊ヲ奉祀シ其ノ当地御発足ノ日ナル十一月朔ヲトシ赤飯ヲ炊ギ旧例ニ依リテ神前ニ捧ゲ後チ村民一同ニ配与シテ二王ノ御追福ヲ為スヲ飯遺福ト称シ今日ニ至ル<sup>(81)</sup>。

以上は京都府宮津市難波津に鎮座する麓神社に伝わる、飯遺福（いいやりふく）に関する伝承であり、『難波野郷土誌』が「今村に保存する所の飯遺福帳の綴つたものゝ中に」あつて由来を記述したものと紹介している。飯遺福は「居在福とも書いてゐる。其の起源は何時であるか詳かではないが古くより行はれた年中行事」<sup>(82)</sup>であり、「此の二皇孫の御潜行に対し赤飯を炊いて御弁当に差上げ、俚民一同御別れを惜んだといふ十一月二十日に村の青年の一同が玄米を貰ひ集め、舂いて白けて夫れを強飯に蒸し握飯にして其の晩に村中に配るといふの行事であるから中々繁忙である。此の行事に対し村から神酒一升、掛鯛料拾銭、糯米一斗二升、小豆二升、豆腐一箱の寄付、また宿元から味噌、醤油、葱、燈火を寄附し、其の他の雑費は千円の団体公成社の社員が負担して年々継続しつゝある。」<sup>(83)</sup>という。

また、『加悦町誌』も「宮津市難波津に麓神社が鎮座、里人は先祖とのつながりを誇りとしている。それは、億計王、弘計王が播磨へ発つ時、里人は赤飯を炊き名ごりを惜しんだ。／今日、神社の行事に“飯遺福”なるものがある。同社は、府中地域の古社として、仁徳天皇と億計、弘計の二王を祭っている。」<sup>(84)</sup>という。実見していないので現状を報告することができないのだが、現在でも 12 月第 1 日曜日に麓

神社の飯遣福祭として、二皇子が旅立つさい村人が赤飯を献じた故事にちなみ、神前に赤飯を奉納しているようである。藁苞に収めた赤飯は終了した後に参列者で分け合うという。だが、梅本政幸は飯遣福について、少しばかり異なった内容を報告している。

府中の東、灘波野部落に麓神社とよぶ小さな社がある。／ここには億計、弘計二皇子を祀っている。安康天皇の代、四五年に眉輪王(まゆわのきみ)の乱というのが起きた。允恭(いんぎょう)天皇の皇子穴穂命は兄の軽皇子を殺して帝位につき、安康天皇となったが大草香命を殺しその妃帯姫を奪って自分の妃としたため、大草香の子眉輪王は父の仇と天皇を殺した。天皇の弟雄略は眉輪王を殺し、さらに帝位のじやまになる履中天皇の皇子市辺押磐王(いちのべのおしわのきみ)を蚊屋野(かやの)に殺して天皇の位についた。そこで身の危険を感じた日下部使臣と子吾田彦は億計、弘計の二皇子とその母帯姫(はえひめ)をつれて与謝へ逃れ、灘波野にかくれた。母の美姫はこの冬病死し、日下部使臣も前途を悲感して自殺した。／弟弘計はここで小野姫をめぐって妃としたが、追々と身近に危険が迫ったので、大内峠より三重長者五十日真黒人を頼って落ちていく。ちょうど村人はぼた餅を差し上げようと準備していたのが、あまり出発が急なため、小豆を炊きたての餅米の中へ投げ入れて差上げたので、その風習が残っている<sup>(85)</sup>。

また、『難波野郷土誌』は類例も紹介している。すなわち、「最近の週間鉄道公論に鉄道省菅谷技手が「丹後めぐり」と題して第八卷第二十六号和江の部に載する処、／和江には和江神社がある。安康天皇二年冬十二月億計弘計の二皇孫が酒饌を供進して開運を祈願せられし処で、今に其の遺風として毎年十一月五日大小二桶の酒を捧げて祭典を行ふ慣例がある。／和江では酒であり此は飯であるが兎も角似通った慣例が伝はつたのには何か共通の因縁がありそうに思はれる。而かも和江は十一月五日難波野は其月二十日道筋と日取とも順序になる。」<sup>(86)</sup>というのである。

『加佐郡誌』も「安康天皇の即位二年丙申冬十二月に億計弘計の二王が難を避けられてたゞいまの舞鶴町宇大内に安宮を造つて潜居せられたので大内の名称がこれから始まつたと云ふことである。又、丸八江村和江の和江神社では両王が酒饌を供へて関連を祈願せられてから後、村民は代々その徳をうけついで毎年十一月五日に大小二桶をお供へして祭礼を行ふ慣例があると云ふことである。」<sup>(87)</sup>という。和江神社は十一月五日に酒を奉納する一方、麓神社は十一月二十日に飯を奉納するから、祭日が訪問した順序に対応していると考えれば、難波野に北上する途中に和江に立ち寄ったのだろうか。

そして、身の危険を感じた二皇子は難波野を離れて、五十日真黒人が居住する五十河に逃れたのだろうか。西尾維新の小説に登場しそうな奇怪な名前を持つ五十日真黒人(いかがまろうど)は、垂仁天皇の皇子である五十日足彦の子孫であり、三重長者として知られている。二皇子を匿った人物でもあり、現在の京丹後市大宮町五十河に居住したと伝えられている。五十日真黒人は『日本書紀』や『古事記』にこそ見えないが、『丹哥府志』や『丹後旧事記』などに登場する<sup>(88)</sup>。『丹哥府志』は宮津藩の儒者であり藩医でもあった小林玄章とその子の之保、孫の之原が宝暦13年(1763)～天保12年(1841)という長い年月をかけて著述した記録であるが、同書の巻之6は三重長者五十日真黒人について、こう述べている。

億計、弘計の二皇孫父を市辺押磐といふ、市辺押磐は履仲天皇の皇子なり、安康天皇の崩ずるに及んで雄略帝市辺押磐を殺し立つ天子となる、是時に当て市辺押磐の臣日下部使臣億計、弘計の二皇孫を奉じ、丹波余社に通れ五十日真黒人の家に匿る、清寧天皇の御宇に播磨国司来目小楯其よしを以聞、よつて億計弘計二皇孫初て都へ帰る、於是五十日真黒人を以て三重の長老とす。

『大宮町誌』は五十日真黒人が居住した「五十河に五十河谷という深い谷があり、約2km余り奥の谷間に石垣の跡の残る十坪程ずつ三段になった所があり、古来三重長者五十日真黒人の屋敷跡という。東

側は岩石の絶壁で下に小川の流れる要害の地であり、北には山を負い、南及び西には石垣を作って防備を固めていた形式が残る。背後の道は遠く世屋に通ずる。この付近には殿様藪という竹藪があり、又二王寺が牛飼いたという「王子がなる」という台地もある。これらからこの地は真黒人が二皇子のために築いた隠家であったのであろう。<sup>(89)</sup>という。だが、同書は二皇子が避難した場所に関する異説にも言及している。

ここで一言しなければならないのは二王子避難地について五十河以外に異説のある事である。関清謙の「丹後考」に「与謝郡須津村の宮ヶ谷なりといひ、他にも異説あり。温江村にも伝説あり。また、本匠村浦島筒川及び日ヶ谷にも説あり。」とあり、「丹後細見録」にも「延喜式与謝郡に木積神社あり。三重郷皇住村に置き祭神億計弘計二尊。（五十日真黒人の記可見）然るに外垣村にも木積神社ありて二尊一先づ避難し更に雄島（大島）に匿るとの説を立て、又、栗田村にも宿野に避難せりと云ひ、久理多（栗田）神社は二尊を祭るといふ。与謝郡にも御潜在の伝説あり。同村小字峠の上宮は億計命、小字北の下宮は弘計命を祭るといふ。所説何れによるべきや」とある。（三重郷土志より引用）丹後考、丹後細見録の諸説は恐らく後世の付会が多いであらう。「丹哥府志」等に右の記事がない上、精しく祭神を書いている。「丹後旧事記」の神祇部にも与謝郡須津或は栗田等の各神社に二王子を祭神としたものは全くない。ただ、久住（皇住）の木積神社のみ延喜の昔から億計、弘計二王子を祭神として尊崇し来っている。この事実からみても二王子避難の主要地は五十河地区ではなかろうか<sup>(90)</sup>。

ところで、江戸時代末期～明治時代に活躍した国学者である飯田武郷は、『日本書紀』を注釈した『日本書紀通釈』の著者としてよく知られているが、巻之 45 において五十日真黒人に関する興味深い風習を紹介している。他に類例を確かめることができなかったのだが、五月五日の幟の絵に牛飼童が牛に乗る様子を描いたものを牛飼様殿（うしかひさんど）と名付けて語り伝えた風習が五十河において存在しており、童謡などにも残っていたようである。これは二皇子が都に帰還して皇位に着いた後に、かつて牛飼童として働いていた二皇子を慕って、こうした絵を描いて語り伝えてきたものだったらしい。以下がその内容である。

日下部氏の丹波に由緒あることは。上なる浦島子も。丹波与謝郡人。（中略）今難をこゝに避玉へるも。日下部氏の族などによられしならん。（中略）其より丹波国に入まし。余社郡を経て。丹後国丹波郡（中略）に打越まさんとて。其郡なる三重郷に到り坐る。其峠を大内峠といふ。（中略）三重村（中略）にて。御身をしばし忍坐し、事。丹後旧事記に見えたり。なほ其国人の云伝ふるをきけは。此大内峠を下り果たる処に。五十河村と云あり。そこに当昔五十日真黒人と云る長者あり。此二王子をいたはり奉りて。己が家に隠しおきて。養ひ奉りしとなり。五十河と五十日と字のたかひはあれと。俗に今もいかゞ谷といふと云り。其長者の許につかはれましける時の古事を。下文に。困事於人飼牧牛馬とは記し、ならん。今は此国にては。五月五日の幟の絵に。牛飼童の牛に乗れるかたをかきて牛飼様殿と名けて。語伝ふるとなん。近き頃まで其習慣ありて。童謡などに残れりと云り。是は二王子後に都に還座して。帝位に即玉ひし後に。当昔いましけん時のさまを。慕ひまらせて。かゝるものにも御かたを画かきて。いひ伝ふる事とはなしたりけん。扱其より播磨国には到坐るなり<sup>(91)</sup>。

こうした風習は神社における祭祀というわけでもないが、年中行事を構成する要素として大きな役割をはたしており、二皇子の物語を視覚化することに少なからず貢献していたと思われる。やはり二皇子の物語を n 次創作する効果的な方法が提示されているようにも思われる。以上、二皇子の物語が祭祀において n 次創作されてきた事例を紹介してきた。いずれも二皇子を祭神として祀った上で——牛飼様殿

という名前にもそうした意識を読み取ることができるだろう——、二皇子の物語を祭祀において視覚化することに成功しており、二皇子の物語をn次創作する効果的な方法が提示されているようにも思われるのである。

## 7 二皇子を祀る丹後の神社

二皇子の物語が祭祀に刻み込まれている消息に関していえば、前節において丹後の事例が播磨の事例にも拮抗するユニークな特徴を備えていることが浮かび上がってきた。だが、それは氷山の一角であり、祭祀に限定しなければ、丹後においても二皇子を祀る神社は数多く存在している。新型コロナの影響によって実際に訪問する機会が得られなかったため、やはり文献に依拠しながら管見した範囲で紹介しておきたい。たとえば、京都府与謝郡与謝野町与謝に鎮座する上宮神社と下宮神社にも、同じような伝承が存在している。

『加悦町誌』は「加悦町与謝に、上宮、下宮の二社がある。村人は上宮に億計王、下宮に弘計王を祭り、その仁政をしのんだ。それは二王が庶民の間に溶け込み、ここ与謝で稲の栽培、牛の飼養などについて知識を得、儒教にも造詣が深かったという。そのことが、村人の殿舎の造営となったのである。なお、弟の弘計王が、さきに皇位につき顕宗天皇となった時、その皇后を難波野から迎えている。(后は雄略天皇の子磐城皇子の女小野女王)」<sup>(92)</sup>という。現在でも上宮神社はオケノミコを祀り、下宮神社はヲケノミコを祀っている。

だが、こちらも二皇子が避難した場所に関して異説があり、『京都府与謝郡誌』上巻は「但し二王御避難の地は丹後旧事記、丹後一覽集等に與謝郡三重谷なりとて久住村に比定し丹哥府志には三重村筒川村と分れて御潜坐ありと云ひ丹後細見録又殆んど同様の記事あり丹後考には須津村の宮ヶ谷なりと云ひ或は外垣の木積谷なりとも云ひて一定せず境内風神社の小祠あり、氏子二十九戸、例僚同上。／尚小字中里に無格社稻荷神社あり。」<sup>(93)</sup>という。また、『京都府与謝郡誌』下巻は「二王子御潜在趾」として、各地に残る異説を概観している。

安康天皇の朝丙申天皇崩し給ふや其の十二月履仲天皇の息子市辺押磐尊雄略天皇の為に蚊屋野に寄せられ給ふやその臣日下部使臣億計弘計二皇孫を奉じて与謝郡に難を避け給ひ、更に播州赤石郡縮見の屯倉に遁れ給ひしとて、与謝村字与謝小字峠江の上王子宮は億計尊小字北の下王子宮は弘計尊御潜在の地なりといふ。尤も之れには異説多く丹後旧事記、丹後細見録、丹哥府志、日本書紀通釈等の諸書には三重谷に在りし三重長者五十日真黒人の家に御潜匿の趣を載せ、丹波直見谷の天神社の記録には与謝郡温江村大虫神社の社家なりとし、丹後考には須津村の宮ヶ谷真鈴の宮なりとし養老村岩ヶ鼻日吉神社々記には外垣の木積神社なりとし、府中村郷土誌及び麓神社の明細帳には同村字難波野の麓神社は其の遺趾にて祭神又二王子を祀るとなし、其他本庄村の浦島にも栗田村の久理陀神社にも伝説あり、尚ほ加佐郡大内郷にも皇子御潜在の為に大内の名起れりと為す、之等の真偽は容易に断ずべからざれども今は伝説の存することのみを掲ぐるに止めんとす<sup>(94)</sup>。

京都府京丹後市大宮町延利に鎮座する高森神社と京都府京丹後市大宮町久住に鎮座する木積神社も二皇子を祀っており、似たような話が残っている。『大宮町誌』は高森神社について、「嘉吉三年(一四四三)の大洪水に、久住村刈安の木積神社の神体の一体が、当地の一本木の地に流れ着き、これを高森大明神と称して祀ったといわれ、また、一説には、九墨村の鳥井畷の地に祀った後に、一本木に流れたともいう。今一本木の地は、古宮とも称しているが、宮の跡地を残していない。天保年中(一八三〇—一八四三)に、延利大権現を真写っていた現在後に遷座したともいわれる。／高森大明神は、明治維新に高森神社と改称し、木像の神体を白幣に改めたと「中郡誌稿」に記されているが、現在衣冠装束の

神体を祀っている。／小字名の古森は皇守とも呼び、億計弘計二皇子の遺跡で、高森も同音の訓読であるとも伝えられている<sup>(95)</sup>という。

一方、『大宮町誌』は木積神社について、「当社は「延喜式神名帳」には、三重神社とともに与謝郡内にある。「丹哥府志」に「木積神社（延喜式には与謝郡の部に出す）木積神社今新熊野宮と称し億計・弘計の二皇孫を祀る。俗に高森大明神、三島大明神といふ。億計弘計の二皇孫爰に住居せられしより村を皇住村といふ。」とある。二皇孫は履中天皇（四〇六一四一一）の皇孫億計・弘計の二王で、三重の長者五十日真人の家に隠れていたといわれる。」<sup>(96)</sup>という。また、京都府京丹後市大宮町久住に残る木積神社旧蹟についても、こう書いている。

木積神社はもと刈安奥宮にあったが、文安五年（一四四八）八月地震と大洪水があり大被害をうけたので刈安の宮（古久住口）に移した。その時の洪水により衣冠姿の御神体二体（億計弘計二王子を祀る）の中一体が押し流され延利の小字一本木に漂流したのでこの地に宮を建て祀っていたが、安政年間皇守（延利）の権現山に移し高森（皇守）大明神と称し、御神体はそのまま引継がれて今日に至っている。また、久住刈安の木積神社は残りの御神体一体を祀っていたが、その後弘化四年（一八四七）さらに、現在の「中の谷」口に奉遷した。明治六年社寺改めの際時の官吏が御神体を持ち帰って白幣に改めたとあるから二王子の御神体の内一体は持ち去られた<sup>(97)</sup>。

すなわち、高森神社に安置されている神像は、木積神社の祭神である二皇子の一体であると伝えられているのである。どちらの御神体を持ち去られたのかは語られていないが、丹波に深くかかわるのはオケノミコ、つまり後の仁賢天皇だろう。第4節でも引用しているが、山尾は「二王が辺地を流浪したかのように見える紀や風土記の記述は、兄を「鳥稚子」、弟を「来目稚子」とするその名と不可分の、神仙説による物語の変化形と思われる。」と述べて、「顕宗の一名「来目稚子」が久米仙人の原形の名とすれば、仁賢の一名「鳥稚子」は浦島太郎の原形の名であろう。」という。じっさい、来目稚子が久米の若子につながっていたとしたら、鳥稚子は浦島太郎につながっていると思われる。山尾はこう続けている。

丹波の余社が出てくるのはそのためと考えられるのであって、紀は、「帳内日下部連使主」親子を従えた二王が丹波の余社に逃れ、弟が兄に勧めてさらに播磨の赤石に向い、「丹波小子」の名で二人が飼丁として使役されたとする。丹後国風土記逸文に与謝郡日置里筒川村の日下部首らの先祖「嶋子」の、雄略朝に繫けられた著名な伝承があつて（雄略紀二二年八月条にも）、体系化された段階のこの物語に、渡来人がもたらした、海底を仙境とする、神仙思想の影響が濃いことは、他言するまでもなく定説である。二王の避難に従って丹波の余社に行く日下部連は諸国日下部の中央伴造である。この設定は、余社の鳥子の神仙譚を祖先伝承として伝えていたのが余社の日下部首一族であったからに相違ないし、仁賢の「鳥稚子」（「嶋郎」）の名が「嶋子」の名と無関係に成立したとは考え難い。朝鮮半島からの人々の渡来時期から考えて、仙人に変じた久米の若者・鳥の若者の神仙譚は、六、七世紀にはすでに人口に膾炙していたものと思われ、飼丁の二少年が天皇に変じた物語を一層興味深いものにするため、それへの連想が働くような名と話の筋が添えられたのであろう<sup>(98)</sup>。

そもそも『日本書紀』に見られる「丹波小子」という名前も、丹波から来た子どもという意味だとしたらうなずける。その背景として二皇子、とりわけ「鳥稚子」とも称したオケノミコが丹波の北部に相当する丹後に深い所縁を持っていたことを想定してみたい。それが浦島太郎の物語に反映されているとしたら、二皇子の物語は山尾も示唆しているとおり、久米の若子と浦島太郎という二つの神仙譚が合流した地点に成立したのかもしれない。こうした両者の関係をどう考えたらいいのか、先人も考えあぐねたのだろうか。『紀伊続風土記』巻之 64 は興味深い所説を展開している。

さて久米若子と云は 顕宗天皇の御名にて書紀弘計ノ天皇更ノ名来目ノ稚子とある是也書紀古事記の二書を考るに 顕宗天皇初丹波播磨の間に流離玉へることはあれとも紀国に來り玉へる事を言されは 天皇の御事にはあらし且万葉集の歌の意に依るに久米若子と云へるは由緒ある人の零落て此石室に隠れ住て身まかりし人にて是を追悼する趣に聞ゆれば弘計ノ王の龍潜を出 帝位に即せ玉ふとは甚へ異なる状なり然れとも御名の同きに因て猶深く考るに久米若子は弘計ノ王の御名にあられて弘計ノ王の父王の御名なるへし書紀古事記ともに弘計王の御父を市部押磐ノ皇子とし 雄略天皇を父の讐とのたまひし事を書せるは一なれとも其儀相違ふこと種々なれとも今何れを非とも定むべきに非れとも書紀の伝へにては年紀長きに過てこれも亦不審きと多しこれに由て博通報しの歌の意を合せて通考するに久米ノ若子と云るは弘計王の更名にはあられて弘計王の父王の御名にて弘計王は押磐皇子の御孫に御坐しけん(中略)因りて播磨にて御詣にも押磐尊御裔僕とのり玉ひて御子とはのり玉はさりし又億計弘計二柱の御名も直に其父久米若子に取りし御名と思はるゝなり久米反計なれば兄を大久米弟を小久米と称へしか約りて億計弘計となりしなるへし然るを書紀に其市大を脱て億計弘計二柱の王を直に押磐皇子の御子となし来目稚子の御名繋る所なきを以て強て弘計天皇の更名とせるなるへし然れば初押磐皇子の蚊屋野にて殺され玉ひし時難を避て丹波に遁れ玉ひしは久米若子にて億計弘計の二王には非るなり然れば来目稚子難を避て深く後を晦まして丹波国に隠れ住せ玉ふ其処にて億計弘計の二王は生れ玉ひしなるへし其後とかく搜り求めらるゝ事の厳急て此にも潜り玉ふことのなり難く己は紀伊国に遁れ玉ひ御子達は吾田彦に属て播磨国に忍はせ玉ひしなり来目稚子の紀伊国に來り玉ふも跡を深く晦し玉ふなれば尋常の所には住玉はず石室の内にて一生を送り玉へは誰有て其由縁を知る者なく弘計王の龍潜を出て都に上らせ玉ふ時は既に薨ましゝならん当時の事元より僻遠の地にありて多くは隠忌曖昧の事なれば慥かなることの伝らす

長く引用してしまつたが、二皇子と二皇子の父である市辺押磐皇子の間に久米の若子を挿入して、久米の若子を二皇子の父、市辺押磐皇子を二皇子の祖父として描きなおすことによって、二皇子と久米の若子を結びつけようとしており、苦心の跡がうかがわれる。こうした伝承が古く三穂に伝えられていたかどうかは判断に苦しむところだが、むしろ『紀伊統風土記』の所説が人口に膾炙して、次第に口頭伝承化していったというのが実際であるようにも思われる。両者を無理に結びつけなくても、丹後における浦島太郎の伝承を概観しておけば、オケノミコつまり島稚子を生み出した神話的な背景は、ある程度浮かび上がらせることができるはずである。『丹哥府志』卷之4は京都府与謝郡伊根町本庄浜に鎮座する浦嶋神社について、こう述べている。

社記曰。浦島明神は島子を祭るなり、島子は元いづれの人なる事をしらず。偶然として筒川の庄水江に來りて其長浦島太郎の義子となる、浦島太郎は蓋月読尊の苗裔にして日下部の祖なり。風土記履仲天皇四年始て国史を置き尽く言事を記さしむ、此時に當りて丹波国与謝郡筒川の庄日置里に浦島太郎といふものあり、月読尊の苗裔なり、故を以てこれを長者とし国事をしるさしむ。其弟を曾布谷次郎といふ、次を今田の三郎といふ、浦島曾布谷今田は地名なり、太郎、次郎、三郎は伯叔の次なり、太郎は履仲天皇反正天皇に二代に仕ふ、次郎は允恭天皇に仕ふ、三郎は安康天皇に仕へて武術の聞えあり、安康天皇即位四年眉輪王帝を弑する時三郎これを防戦す、其功すくなからず(国史に日下部使臣其子吾田彦億計弘計の二皇孫を奉じて難を丹波與佐に避るといふ恐らくは此人ならん)。

また、『丹哥府志』卷之6も三重長者五十日真黒人に関して前掲した箇所に續けて、「愚按ずるに、日下部使臣は水の浦島の人也、二皇孫皆五十日真黒人の家を居とするにあらず、蓋分れて両家におるなり、

事は浦島条下に審なり。」という。『京都府与謝郡誌』上巻が「但し二王御避難の地は丹後旧事記、丹後一覽集等に與謝郡三重谷なりとて久住村に比定し丹哥府志には三重村筒川村と分れて御潜坐ありと云ひ」と書いたのはこの部分を意味しているが、「日下部使臣は水の浦島の人也」というのは驚かされる。日下部使臣、つまり『日本書紀』における帳内日下部連使主、『播磨国風土記』における日下部連意美は二皇子の逃走劇を実現させた功労者であったが、オケノミコのみならずその従者である日下部使臣も丹波に深い所縁を持っていたわけである。『丹哥府志』巻之4に戻ろう。

或曰。億計、弘計の二皇孫は市辺押磐の子なり、市辺押磐は履仲天皇の皇子なり、始め安康天皇市辺押磐は履仲天皇の皇子なるを以て立てて太子とせんす、安康天皇眉輪王に弑せらるる（安康天皇の皇后は元大草香の妻なり、根使主の讒によりて大草香を殺し遂に其妻を納れて皇后とす、大草香の子眉輪王は皇后の生む所なれば宮中に養はる、眉輪王父の為に仇を復するとて帝を弑す、皇弟其変を聞くより兵を率ゐて眉輪王を攻む、眉輪王遁れて大臣円の家にかくる、皇弟其家を焼く、眉輪王及円皆焼死、皇弟は則雄略帝なり）に及びて安康天皇の皇弟市辺押磐を殺し遂に位に即く、是を雄略天皇とす、是時に当りて市辺押磐の臣日下部使臣、億計、弘計の二皇孫を奉じて難を丹波與佐に避け、後廿六年を経て播磨の国司来目部小楯其よしを以聞するによって億計、弘計の二皇孫初て歸る、実に清寧天皇の三年なり。始め難を避けて丹波與佐にかくる、弘計年甫十歳、億計年十八歳、立て天子となる弘計卅八歳来目の稚子と称す、位に在る僅に三年、年四十にして崩ず（顕宗天皇）皇兄億計王立て天子となる、年四十九歳嶋郎と称す、位に在る凡十一年、年五十九歳にして崩ず（仁賢天皇）。事は続日本紀に詳なり。蓋鳥子の蓬萊に詣りて数百年を経て歸るといふは実は仁賢天皇雄略帝の難を避けて丹波與佐に詣り、数十年を経て都に帰り立て天子となる、年四十九歳猶鳥郎と称す、於是知るべきなり、実に鳥子の事あるにあらずといふ。

二皇子の物語が祭祀に投影映されている籠神社や和江神社、二皇子を祭神として祀る上宮神社と下宮神社、高森神社と木積神社、オケノミコや日下部使臣が所縁を持つ浦島神社……。丹後の事例は播磨の事例をも凌駕するようなユニークな特徴を開花させており、二皇子の物語を個別的な場所に結びつけながら n 次制作する過程が長い年月を通して進行してきた消息を示唆している。といっても、丹後は何といても浦島太郎の物語が抜群の知名度を誇っている。また、二皇子の物語においても二皇子が自分たちの身分を明かすことによって転換点として決定的な意味を付与された播磨に比べたら、丹後はあくまでも通過点であり劇的な衝撃をもたらすような場所でもないだろう。それは県立万葉文化館の近くにひっそり佇む弘計皇子神社についても同様である。だが、こうした従来の状況は一定の契機を獲得することによって、劇的に変化する可能性を秘めているのである。

## 8 文芸化する二皇子の物語

従来の状況を突破することに寄与する方法はいくつか考えられる。たとえば、学習漫画の題材として活用することは、二皇子の物語が血塗られた古代において例外的に道徳的な美談であるため、そもそも数多くの人々に馴染みやすいはずである。幼少期に体験してこのような論文を私に書かせているという意味においても、絶大な(?)効果をもたらすことはまちがいない。また、学術漫画とでもいうべき領域を開拓することもできるだろう<sup>(99)</sup>。共同研究したいもそうした確信に根ざしているといえそうである。また、二皇子の物語を文学作品や舞台作品に転位させることも有力な方法であると思われる。だが、従来こそ二皇子の物語は必ずしも文芸化されていなかった。稲垣が随筆において取り上げているが、彼は二皇子の物語を小説に発展するような素材として認識していなかったのかもしれない。

オケ・ヲケの二王子が身を隠したのは、美囊郡の志染だとの説がある。彼らの祖父履中天皇が淡路



鳥の獵の帰り立ち寄ったゆかりの土地で、池原宮などの地名がある。しかしそこは日下部むらじの遺址で、王子が居たのは明石郡押部だとも云われる。屯倉のおさは忍海部細目だからである。語呂は似ているが、押部は二王子還御にさいして儀仗兵を此地の者がつとめたので、押兵村と読んだことから転化したとする方が本当であろう。忍海部とは、功によって細目がもらった役目で、これに依ると、当時海は神出山の麓まできていたのではなろうか？ 此辺が畿内から山陽への唯一の通路だったことは、今も土器が出たりするので察しられる。こうなると、王子くるわは実は北方から移転したということになる。ともかく、神出村の背後が押部谷で、もう一つ丘を越せば志染になるから、細目の屋形はその両方にあった。縮見の方には二王子が村童を集めて笛を吹き舞を見せ、その代りに柴刈りを手伝わせたという場所がある。更に志染の岩窟の北には、王子が勅使と会見した逢初川がある。この志染の名は、履中帝が里の小流をほめた時、みちの筥のふちに匍い上っている蜷に眼をとめ、「これは阿波の国で食べた貝によく似ている」といったことに依っている<sup>(100)</sup>。

どちらかといえば紀行文の趣を感じさせる文章であるが、こうした地平に根ざした小説が生み出されたとしたら、どのようなものだろうか。『一千一秒物語』に追加されるようなショートショートだったのか、『弥勒』よろしく宇宙的郷愁を感じさせる自伝的な作品だったのか。だが、存在しない作品を論じることがむずかしいので、実際に二皇子の物語を取り上げている作品を取り上げてみたい。美談であることが再評価されているのだろうか、近年ようやく文芸化の兆候が見られる。

比較的最近の出来事だが、藤田六郎兵衛が総合プロデューサーを務めた加西市播磨国風土記 1300 年祭の一環として、新作能「針間」と新作狂言「根日女」が上演された。どちらも二皇子の物語であり、平成 27 年 (2015) 3 月 16 日に国立能楽堂で初演されて (「針間」は半能として上演された)、5 月 4 日に兵庫県加西市の玉丘跡公園でも上演された。「針間」は平成 29 年 (2017) 5 月 4 日、加西市民会館文化ホールで開催された第 2 回加西能においても再演されている。一方、「根日女」は平成 28 年 (2016) 以降、毎年 5 月 4 日に加西市民会館文化ホールで開催される加西能において上演されている。「針間」は梅原猛が書き下ろした作品であり、梅原が創作した意図などがこう紹介されていた。

『播磨国風土記』には、狂言の題材となる話は、いくつもあります。けれど、能として舞台にかけられる話は見当たらない。当初はそう思いました。しかし、読み込んでいくうちに、牛飼いから帝になった二人の皇子の話は、『播磨国風土記』の中でもっとも興味をひかれる物語だ、と思いました。／この物語を、皇子たちのゆかりの地で上演できることが、またじつにすばらしい。こうした物語を持ち、それを現代によみがえらせ、伝承しようとしている加西市は、大変豊かな土地柄なのだろうと思います。古代は出雲と直結していた地でもあります。／実際、古代の王たちの物語の中でも、牛追い・馬飼いという奴になりながら、その後、帝になったというような話は、これが唯一だと思えます。苦労を重ね、身をやつした末に帝になるという物語は、日本の文化の優しさの象徴のようにも思えます。／「帝と奴」というテーマは、私がヘーゲルで語る「主人と奴隷」に通じる心理劇で、それを二人の皇子の物語として、おもしろくも哀しく仕立てることができました。(中略) 兄は気のいい優しい男、弟は現状に我慢ならないきかん気な男、とまったくキャラクターが違いながら、互いを思いやる愛を持っている二人の皇子。それもこの物語を感動的なものにしていきます<sup>(101)</sup>。

「針間」のあらすじは「安康天皇三(四五六)年十月、二人の皇子・億計王(意奚とも)弘計王の(袁奚とも)の父・市辺押磐皇子が、皇位継承の争いから大泊瀬皇子(後の雄略天皇)に近江国で殺された。二人の皇子は日下部連に導かれ、播磨国明石や三木の志深村の岩室に隠れ住んだが、志深村首・伊等尾の家で牛飼いの下男として仕えることになった。数年経ったある日、伊等尾が催す新築祝いの宴で歌を所望された弟の弘計王は、歌い舞いながら、ついにその歌詞で自分たちの正体を明かす。／国司の少

楯は大いに喜び、これを都に報告。二人の皇子は都に迎えられ、顕宗天皇元（四八五）年に弟の弘計王が即位、兄の億計王は皇太子となった。」<sup>(102)</sup>というものであり、『播磨国風土記』を忠実になぞっている。だが、現代語の能であること、そして『日本書紀』を編纂した舎人親王が最初と最後に前後の経緯を説明することが特徴的である。一方、「根日女」は河合祥一郎が台本を制作して、野村萬斎が監修・演出を担当した。野村のインタビュー記事を引用しておきたい。

加西市には、「玉丘古墳」という、皇子を物語るすばらしい歴史遺産があります。そこに眠る「根日女」の伝承を、狂言『根日女』として新作し、子どもたちを指導してほしいと依頼されました。／熱意に押されて、シェイクスピア研究の第一人者・河合祥一郎東京大学教授に台本をお願いしました。河合先生とは、『リチャード三世』を狂言化した『国盗人』で一緒し、先生の作品を私が演出し、主演してからの付き合いです。今回の新作狂言『根日女』も、時代を再現しながらもわかりやすく楽しい本にして頂きました。加西市から生まれたこの新作能〔ママ〕『根日女』は、地元の子どもたちによって未来に伝承されようとしています。／昨年の四月から、「加西市こども狂言塾」の塾生たちは、一年にわたってお稽古を続けてきました。オーディションで選ばれた二十七人の塾生たちを支えるサポーターの皆さんにも、多大なご協力をいただきました。正座もできなかった子どもたちが、しっかりと声を出し、謡い舞う姿には日々の稽古がしのばれ、感動的でもありました。／これからも加西市の子どもたちによって、新作狂言『根日女』が未永く継承されていくことを期待しています<sup>(103)</sup>。

「根日女」のあらすじは「播磨国の賀毛の郷（兵庫県加西市）の国造許麻には、美しく不思議な力を持つ娘・根日女がいた。噂を聞いた二人の皇子・意奚と袁奚は、志染の郷から根日女に会いにやってくる。／二人は、敵の間者ではないかと疑う根日女の父・許麻に囚われるが、根日女は二人を助け、二人の皇子は根日女に求婚する。しかし、互いに譲り合ううちに、皇子たちは都に戻るようになった。時を経て、皇子たちは再び根日女に会いに来るが時すでに遅し。根日女は病を得て帰らぬ人となる。根日女の亡骸を納めた墓は玉丘古墳、その村は玉野と呼ばれ、その愛を今に伝える。」<sup>(104)</sup>というものであり、『播磨国風土記』に描かれているが、本稿でまったく扱ってこなかった二皇子と根日女の物語に依拠している。『播磨国風土記』における該当する箇所を引用しておきたい。

玉野の村あり。その所以は、意奚・袁奚二はしらの皇子等、美囊の郡志深の里の高官の宮に坐して、山部の小楯を遣りて、国造許麻の女、根日女命を誂ひたまひき。ここに、根日女、己に命に依り訖はりき。その時、二はしらの皇子、相辞びて娶ひたまはず、日間に至りぬ。根日女、老長いて逝りき。時に、皇子等、大く哀み、即て小立を遣りて、勅りたまひしく、「朝日夕日の隠はぬ地に墓を造りて、其の骨を蔵め、玉を以ちて墓を飾らむ」とのりたまひき。故、此の墓に縁りて玉丘と号け、其の村号を玉野と号く。

すなわち、新作狂言「根日女」は根日女が葬られた玉丘古墳の一带を整備した玉丘史跡公園で上演されたわけである。だが、そもそも悲しい物語であるため、一般的に滑稽な性格を持つ狂言に馴染まないと考えたのだろうか、狂言の演目である「雷」の趣向を加味することによって、雷神によって天に召された根日女を祝うフィナーレを付加している。取って付けたような印象はどうしても否めないが、いかにも不自然な結末であるため、台本を作成するさい苦心した様子がしのばれる。

だが、「根日女」は平成 27 年に加西市播磨国風土記 1300 年祭の一環として国立能楽堂と玉丘史跡公園で上演された以降も、加西市における公演が継続的に実施されている。平成 27 年は野村を含めた狂言師と加西市こども狂言塾の塾生、平成 28 年は野村が指導した加西こども狂言塾の塾生、平成 29 年は野村を含めた狂言師と加西市こども狂言塾の塾生・卒塾生が参加した。そして、平成 30 年以降は加西

市こども狂言塾の塾生・卒塾生が参加している。残念ながら令和2年(2020)の第5回加西能はコロナ禍によって翌年に延期されたが、こうした軌跡は「根日女」が加西市という個別的な場所に結びつけられることによって、着実に定着している消息を示唆している。「根日女」は二皇子の物語が狂言という馴染みやすい古典芸能を通してn次創作されている好例であるといえるだろう。

私は第1節において、「本稿は二皇子の物語がn次創作されてきた過程、つまり後世にどう受容されて発信されてきたのかを見渡した上で、この物語が芸能に大きな役割を付与しており、後世に受容されて発信されるさいも芸能に大きく依拠している消息を浮き上がらせたい。」と書いた。二皇子の物語に取材した新作能と新作狂言が生み出されたことも、証左の一つとして数えられるはずである、したがって、本稿も芸能に力点を置いて論述してきたが、二皇子と根日女の物語は狂言のみならずマンガにも転位している。

『パフェちっく』で知られるななじ眺の『ねひめのとき—根日女伝説×『パフェちっく』—』は、『加西市播磨国1300年記念事業として播磨国風土記の根日女伝承をもとに作成したオリジナル作品』<sup>(105)</sup>であり、インターネット上でも「根日女マンガ本プロジェクト」として紹介されている。すなわち、「次世代を担う子どもたちに、播磨国風土記を広く知ってもらい、「ふるさと加西」に対する愛着や誇りを育んでもらうため、風土記に記されている根日女伝説をテーマにしたマンガ本を制作しました。／加西市出身の人気漫画家・ななじ眺(ながむ)さんによる描き下ろし。ななじさんの作品である「パフェちっく！」と根日女伝説のコラボが実現しました。」<sup>(106)</sup>というのである。

『ねひめのとき—根日女伝説×『パフェちっく』—』のあらすじは「おばさんちである加西市を訪れた新保壺と新保大也。従兄弟であり、同じ女の子に思いを寄せている。北条鉄道に揺られながら、その関係は、加西に伝わる根日女伝説と同じだと壺が話し出す…。／遥か1500年前に播磨国賀毛郡を舞台にくりひろげられた愛の物語。」<sup>(107)</sup>というものである。巻末に「加西へようこそ！」という文章や玉丘史跡公園ほかの案内などが付されているのだが、ななじ自身が書いた「あとがき」は二皇子と根日女の物語をn次創作した主体の率直な心情を吐露している。

歴史の勉強がすごくすごく苦手だった私。それはずいぶん大人になった今でも変わらずで、『風土記』だって『ふどき』だっけ？『ふうどき』だっけ？なんてレベルで(国語も相当ヤバイんじゃないかい…)。播磨国風土記がまとめられて1300年。加西市から「根日女伝説をぜひ漫画にしてほしい」とお仕事の依頼をいただいた時、本当に悩みました。私なんか描けるのかな？描く前に古代の勉強をしなきゃいけないよね？うーんうーん……………なんとかなるか！ううん、なんとかしよう！そしていざ物語を考え始めると、案の定、手が動かない動かない。つまりあなたも動いてない動いてない。なんでかな？きっと私がお馬鹿なことだけが理由じゃない。そうだ、わかった！言い伝えられている根日女のイメージが、なんだか遠い人だからだ！神秘的な力を持っていたという説がある根日女。『伝説』とはいえ、私は、根日女をファンタジーな存在にしたくなかった。天候を占えるという説は。空や雲の色・形をよく見ているから『天候の予測ができる』。そして人のことも愛情いっぱい心で見ているから『人を見る目がある』、そんな女の子にアレンジ。さらに私の以前の作品『パフェちっく！』の主人公・風呼の明るさも根日女にプラスして、限られたページ内に恋の瞬間をできるだけたくさん入れて。意気と哀気根日女を譲り合ったという説も、『譲り合った』というよりも『奪い合わなかった』のかもしれない、それは肉親同士が命を奪い合い争うのを見てきた2人だったからかもしれない、なんて考えに行きついたり。そうしてるうちにこの物語を描くのがどんどん楽しくなってきました！…というのはちょっとだけ嘘で、最後まで苦戦したところもやっぱりあるのですが。だけど、自分なりに根日女達を考え、地元加西市のことを考えること

ができたのは、とてもいい勉強になったし、幸せでした。ありがとうございました！／根日女と二人の皇子の恋模様、私の愛する故郷・加西市が、すてきな色となって皆様に染みますよう<sup>(108)</sup>。

好感を抱かざるを得ない文章であるが、ななじは『ねひめのとき—根日女伝説×『パフェちっく』—』において、n 次創作を二重に実践している。すなわち、『播磨国風土記』のみならず自身の代表作である『パフェちっく』をも n 次創作する試みを実践しているのである。ななじが仕掛けたアクロバティックとも思われる文芸化の試みは、古代と現代を結び付けることに寄与しており、それが最後の数ページに書き込まれた「3人の想いは 変わらずここにあるよ」と「後は自分で叶える 今生きてるオレ達はそれができるだろ」という台詞に結晶しているようにも感じられる。

## 9 万葉文化館における二皇子の物語

そして、ようやく二皇子の物語を取り上げたしもかわらの作品に戻ることができる。しもかわらが作成したイラストは万葉文化館で上映する短編アニメを想定したものであり、イラストに付された解説にも短編アニメにふさわしい登場人物を造形する工夫が提示されている。しもかわらは「沢山の魅力的な登場人物たち」について、「記紀には淡々と事柄が描かれているが、描かれた人物の具体像や心情を考えると、この物語は魅力的なキャラクターで溢れかえっている。」<sup>(109)</sup>という。以下に書かれているショートムービーという表現は短編アニメに換言してもいいだろう。

もしこのドラマのCMを作るとしたら、人気俳優を贅沢に起用した「登場人物を前面にアピールした」演出が良い。人物の象徴的な映像と名前、物語の鍵となる出来事や物、そして現存する遺物やゆかりの場所などをちりばめて「印象に残り、よく分からないのにとっても気になる」という感じのショートムービーがぴったりだと思う。メイン・サブ共に魅力的な人物が多ければ、様々な好みを持つ視聴者へのフックを増やすことに繋がる。まずは「人物の象徴的な映像」の手掛かりになるキャラクター設定をしてみた<sup>(110)</sup>。

最初は「億計(兄オケ)・弘計(弟ヲケ)」である。しもかわらは「この兄弟は互いに譲り合う姿が美德として描かれる。どちらも悪役にならず、揃って貴種流離譚の主人公になっている例は珍しい。この時二人の性格が異なる点が重要だ。優しく思慮深く温厚な(裏返せば弱気で決断力に欠く)兄と、勇敢で賢く行動的(裏返せば気性が荒く短絡的)な弟が補い合うことでより魅力的な一つの存在に成り得ている。物語のスタート時に小児であることが二人の関係(二人で一つ)を自然な物と感じさせている。キャラクターを考える上では二人の一体感と性格の違いを明確にしようと思った。そして善良で健康な感じ。血で血を洗う権力闘争の中であって「特異な清らかさ」が彼らの個性なのだと思う。」<sup>(111)</sup>という。

しもかわらはこうした「特異な清らかさ」の起源を人的な環境に求めている。「幼少期から20代までの不遇にも関わらず彼らが善良な人として育った要因を現実的に考えるとすれば、それは人的環境しかないとわたしは思う。研究員さんから「当時の人が現代人と同じ感受性を持っていたとは考えにくい」との指摘もいただいたが、形のない心の様は想像する以外にないので、ここは「現代日本のわたしたちとも共通する心理的回路を持っていたと仮定」して、作業を進めた。そして過酷な環境の中で人が歪まずに育つには、必要な愛情を注ぐ者の存在が不可欠なはず！という(相当私的な)信念のもとに、他の登場人物たちをイメージしてみた。」<sup>(112)</sup>というのである。

しもかわらはななじが大きく取り上げた根日女について、「こちらは『播磨国風土記』等サイドストーリーの登場人物だが、播磨国の豪族の娘・根日女も、苦難の日々を照らす温かな人との関わりの一つとして登場させてもよいかもしれない。「可憐な美少女」の登場は受けを狙いすぎかもしれないが一案としてはあっても良いかと思う。」<sup>(113)</sup>という。ななじの作品とも響き合う切り口であるが、本稿は二皇子

と根日女以外の登場人物をくわしく扱うことができなかったので、しかもかわらが造形したほかの登場人物についても見ておきたい。

しかもかわらは「飯豊皇女 イドヨノヒメミコ」について、「二皇子の姉(叔母との説・姉と叔母共存説もある)。清寧天皇が崩御し二人が皇位を譲り合っている10ヶ月程の間政務を執ったとされる。姉だとすれば彼らより10歳ほど年長、思春期に穏やかな暮らしを奪われた彼女の人生もまた激動だったはず。忍海の角刺神社が飯豊皇女の宮の跡とされ、彼女が鏡として使ったと伝わる「鏡池」がある。「イヒトヨ」はフクロウの古名であることから夜をイメージした。」<sup>(114)</sup>という。また、「白髪皇子 シラカノミコ(清寧天皇)」<sup>(115)</sup>について、こう述べている。

雄略天皇の死後皇位を継承し、二皇子の生存が判明した時「喜んで二人を迎えた」とする。生まれつき白髪だったためこの名がついた(アルビノだったと推察される)。この名のせいで従来の学習漫画などでは老人の姿で描かれたりしたが年令的には二皇子と大差ないようだ。皇位のために身内をも次々と排除した猛々しい父・雄略とは異なり、自分を「仇の子」と憎んでいて当然の二人を(自身に妻子がなかったとはいえ)受け入れた、その心理の背景には何があったのだろうか?と気になる。／アルビノの人は視力や肌が弱い傾向はあるものの色素の少なさ以外に違いはない。しかし古代、彼を皇太子にした雄略は、美しい彼の姿に吉兆を見た。シラカの母・葛城韓媛は雄略によって父を失っているし、伊勢の斎宮になった同母姉(妹の説も)の稚足姫皇女は父・雄略に無実の罪で嫌疑をかけられ自害している。母や姉を不幸にした父は彼の目にどのように映ったのか?その父に大切にされる自分をどう感じたのか?父とは違う生き方を、彼は選んだのではないか?完全な空想だが、証明されることのない「心情」を追うと、どこまでも魅力的なサブキャラクターである<sup>(116)</sup>。

しかもかわらは二皇子の父である市辺押磐皇子、そして父の仇である雄略天皇についても「オケヲケ兄弟を主人公にした物語ではそう出番は多くはないが、登場人物の多様性で魅せるCM的な短編ムービーを作るのであれば、彼らの父であるイチノヘノオシハとその仇であるオオハツセワカタケル(=雄略)は個性的で登場させないのは惜しい。この物語の源流にあたる位置に存在する二人の内、知名度が高いのは圧倒的に雄略。「猛々しく残忍」でありつつ「英雄」でもある雄略像は「善なるヒーロー」に慣れたわたしたちには理解しがたいが、古代の人々が奇麗事だけでは生き延びられない野生的な世界で生きていたことに因るのだろうか。情報の少ないオシハはその名の通り八重歯に、そしてワカタケルの猛々しさと対照的な柔和さを強調してみた。」<sup>(117)</sup>という。

そして、「他にも幼い二皇子を守って播磨国に逃がした日下使主(改名して田疾来。縮見山にて縊死)・吾田彦(後々まで付き従う)父子」についても、「高貴な身分ではなく記紀にはさりりとしか触れられていないが、二皇子の人格形成を考えるならば重要な人的環境でありキーパーソンである。」ことを強調した上で、「人が「いかなる人になるか」において環境の役割は大きく、理不尽な苦難の中にあって兄弟が歪まずに成長した陰には必ず不可欠な要素としての十分な「愛情」があったに違いないという前提で、かなり強引に私論を述べてきたが、アニメーションのように物事をきわめて具体的に表現する手法においては特にそういう普遍的・心情的なものは有効だと思うのである。」<sup>(118)</sup>と述べている。すなわち、短編アニメを制作するさい愛情のような「普遍的・心情的なもの」が大きな役割をはたす可能性を示唆しているのである。

そう考えれば、二皇子の物語は万葉文化館で上映する短編アニメとして理想的な事例であると考えられるだろう。あらためて芸能・場所・心情という三つの支点に沿って再説しておきたい。二皇子の物語が「見る／見られる」関係によって紡ぎ出される芸能に大きな役割を付与しており、後世に受容されて発信されるさいも芸能に大きく依拠している消息はくわしく前述した。二皇子の物語は幾重にも芸能に

彩られることによってこそ、長い年月を通して n 次創作されてきたのである。

そして、私は第 2 節の末尾において、「二皇子の物語がそもそも「見る／見られる」関係によって紡ぎ出される場に支えられていたとしたら、二皇子の物語を短編アニメ化する試みによって現代の観客に提示することは、「見る／見られる」関係が入れ子構造として再帰的に反復されることを意味している。こうした構造は現代社会に生きる私たちが短編アニメを通して、二皇子の物語を内在的に体験することに少なからず貢献するはずである。」とも述べていた。アニメも「見る／見られる」関係によって規定される表現である以上、二皇子の物語が芸能のみならずアニメというメディアとも高い親和性を持っている可能性は大きいだろう。

一方、二皇子の物語は個別的な場所に結びつけられることによって、地域社会における伝承として定着していった。こうした過程は二皇子を祀る神社や祭祀が播磨や丹後に少なからず存在している状況によっても知ることができるが、本稿を作成した直接的な契機とでもいべき弘計皇子神社がその好例であることはいうまでもない。もちろん地元の方々にはヲケノミコを祀る神社であるという事実を必ずしも強く意識していなかった。だが、しかもかわらは「木立にぽっかりと開いた小さな森の入口、その枝の下をくぐると、木々の中にひっそりと佇んでいる。少年の二皇子たちが隠れていそうだ。」<sup>(119)</sup>と書いている。そして、偶然にも万葉文化館の徒歩圏内に立地しているという意味において、特異かつ理想的な場所性を帯びていると考えられるのである。

私は 2019 年度の申請書類において、「サブカルチャーに依拠した聖地巡礼は、地域振興に寄与するコンテンツツーリズムの素材として取り上げられることが多い。だが、コンテンツとして流用される伝統文化や地域文化に対する関心は必ずしも十分に深められていない。」ことを指摘した上で、「期待される成果」の一つとして「万葉文化館自体が記紀・万葉集に取材した短編アニメーションを制作することを想定して、ラフ画や絵コンテを作成する。とりわけ短編アニメーションに向けた叩き台として、一定枚数のラフ画を完成させる。そして、将来的な目標についていえば、短編アニメーションを館内で上映することによって、万葉文化館自体が古代文化を二次創作する主体として実践的な成果を発信することをめざしている。」と書いている。

実際は館内の地下 1 階に設置されている万葉劇場で上映したいと考えた。万葉劇場は「万葉歌人の歌をもとに、それぞれの歌人の個性や心情、人間関係や時代背景などをとりあげ、人形、映像、アニメーションなどの複合的な手法で紹介する劇場空間です。／能や雅楽をはじめとした日本の伝統芸能のエッセンスを抽出し、新しい創作歌劇として現代に生まれ変わらせます。／人形と映像による歌劇「額田王」と「柿本人麻呂」、アニメーション「万葉のふるさと」の 3 本立てです。」というものであるが、こうした劇場空間の新しいメニューとして短編アニメを追加することができないかと考えたわけである。

もちろん私が考えた「期待される成果」は、万葉文化館に承諾してもらった内容でも何でもない。あくまでも私の個人的な腹案であるが、アニメにまつわる昨今の聖地巡礼ブームを念頭に置いて、弘計皇子神社を二皇子の物語にまつわる聖地として再評価した上で、万葉文化館を聖地巡礼のゲートウェイ兼インフォメーションセンターとして位置づけることはできないだろうか。『日本書紀』編纂 1300 年という節目を迎えて、『日本書紀』にも登場する二皇子の物語に取材した短編アニメを制作することは、こうした構想を実現するための、いわば第一歩として大きな意味を持つはずである。

幸いにも万葉文化館の周辺は弘計皇子神社以外にも魅力的な場所が点在している。こうした場所に取材した短編アニメを万葉劇場で上映することによって、観客が伝統文化や地域文化に対する関心を多少なりとも抱いた上で、短編アニメで取り上げられた場所をめざして聖地巡礼に出かけるような状況が出来たら、万葉文化館は聖地巡礼のゲートウェイ兼インフォメーションセンターとして機能するかもしれ

れないのである。こうした構想は大風呂敷とも受け取られてしまいかねないだろう。現時点でいえば絵空事でしかない。だが、万葉文化館の徒歩圏内に立地しており二皇子の物語を感じさせる弘計皇子神社が大きな可能性を秘めていることはまちがいないだろう。

こうした構想を推進するさい重要な支点として、二皇子の物語における通奏低音とでもいうべき心情もあげておかなければならない。『日本書紀』のみならず『古事記』や『播磨国風土記』にも描かれた二皇子の物語は、血塗られた古代の権力闘争において例外的な美談であり、後世の人々にも一服の清涼剤のような印象をもたらしたようである。梅原は「兄は気のいい優しい男、弟は現状に我慢ならぬさかん気な男、とまったくキャラクターが違いながら、互いを思いやる愛を持っている二人の皇子。それもこの物語を感動的なものにしていきます。」という。ななじは「意奚と袁奚が根日女を譲り合ったという説も、『譲り合った』というよりも『奪い合わなかった』のかもしれない、それは肉親同士が命を奪い合い争うのを見てきた2人だったからかもしれない、なんて考えに行きついたり。」という。

そして、しもかわらは「この兄弟は互いに譲り合う姿が美德として描かれる。」ことを強調した上で、「血で血を洗う権力闘争の中であって「特異な清らかさ」が彼らの個性なのだと思う。」とも「幼少期から20代までの不遇にも関わらず彼らが善良な人として育った要因を現実的に考えるとすれば、それは人的環境しかないわたしは思う。研究員さんから「当時の人が現代人と同じ感受性を持っていたとは考えにくい」との指摘もいただいたが、形のない心の様は想像する以外にないので、ここは「現代日本のわたしたちとも共通する心理的回路を持っていたと仮定」して、作業を進めた。」ともいう。

しかも、しもかわらは「アニメーションのように物事をきわめて具体的に表現する手法においては特にそういう普遍的・心情的なものは有効だと思うのである。」と述べており、短編アニメを制作するさい愛情のような「普遍的・心情的なもの」が大きな役割をはたす可能性を示唆している。じっさい、近年に大きな話題を集めたアニメはこうした「普遍的・心情的なもの」を焦点化もしくは前景化しているものがきわめて多いようにも思われる。したがって、二皇子の物語は古代と現代を結びつける普遍的な心情という意味においても、万葉文化館で上映する短編アニメとして理想的な事例であると考えられるだろう。

本稿はオケノミコとヲケノミコの物語が芸能・場所・心情という三つの支点到に大きな役割を付与しており、後世に受容されて発信されるさいも三つの支点到に大きく依拠している消息を浮き上がらせようとしてきた。こうした消息こそが長い年月を通して二皇子の物語がn次創作されてきた過程の実際であった、といたいところだが、その一端を切り取った程度かもしれない。だが、共同研究において短編アニメの企画を提案したしもかわらの成果が二皇子の物語をn次制作した最新のテキストであることは特筆大書しておきたい。それは現時点でいえば解説を付したイラストの段階だが、二皇子の物語を扱った短編アニメを制作することができたら、万葉文化館の展示に資するのみならず、現代社会に対しても貫通力を持つはずである。

## 注

- (1) 和歌森太郎・カゴ直利『学習漫画日本の歴史』1(国づくりの英雄)、集英社、1967年。
- (2) 阿部乾六「八釣山の草萌え 弘計皇子神社」『季刊明日香風』第22号、財団法人飛鳥保存財団、1987年、112頁。
- (3) 浜野智史『アーキテクチャの生態系—情報環境は以下に設計されてきたか—』、NTT出版、2008年、249頁。
- (4) 岡本健『n次創作観光—アニメ聖地巡礼／コンテンツツーリズム／観光社会学の可能性』、NPO法

オケとヲケの物語を n 次創作する（橋本）

- 人北海道冒険芸術出版、2013年、43頁。
- (5) 和歌森太郎・カゴ直利、前掲書、129頁。
  - (6) 同書、128 - 130頁。
  - (7) しもかわらゆみ「短編アニメの可能性を模索してみた」奈良県立万葉文化館編『奈良県立万葉文化館第17回万葉古代学公開シンポジウム 古代文化の Re:Creation—記紀万葉をアニメ・まんがで描こうとしてみた—』、奈良県立万葉文化館、2020年、8頁。
  - (8) 飯泉健司「記 オケ・ヲケ伝承考——作成者の〈論理〉〈視点〉〈表現〉——」『菅野雅雄博士古稀記念古事記・日本書紀論究』、おうふう、2002年、400頁。
  - (9) 同論文、419頁。
  - (10) 同論文、419 - 420頁。
  - (11) 西條勉「〈ウターマヒ〉構造と劇的変容——歌舞劇の「われ」——」『日本文学』38巻第5号、1989年、3頁。
  - (12) 同論文、8頁。
  - (13) 小嶋瓊禮「新嘗の誥詠の文学」古事記学会編『古事記の文芸性』、高科書店、1993年、334 - 335頁。
  - (14) 相磯貞三『記紀歌謡全註解』、有精堂出版、1962年、464頁。
  - (15) 岡田精司「顕宗・仁賢大王の伝承とその虚構性」説話・伝承学会編『説話と歴史』、桜楓社、1985年、17頁。
  - (16) 同論文、19頁。
  - (17) 尾畑喜一郎「古代〈芸能=劇〉の発生」『古代文学序説』、桜楓社、1968年、50頁。
  - (18) 同論文、50頁。
  - (19) 同論文、51頁。
  - (20) 同論文、51頁。
  - (21) 同論文、49 - 50頁。
  - (22) 同「小子部連羸螺考」『古代文学序説』、131頁。
  - (23) 北郷美保「顕宗・仁賢即位伝承雑考」佐伯有清編『日本古代史論考』、吉川弘文館、1980年、119頁。
  - (24) 同論文、119 - 120頁。
  - (25) 同論文、120頁。
  - (26) 同論文、121頁。
  - (27) 倉林正次「大嘗祭の芸能——清暑堂御神楽考——」『國學院大學日本文化研究所紀要』第6輯、國學院大學日本文化研究所、1960年、142 - 143頁。
  - (28) 北郷美保、前掲論文、122頁。
  - (29) 木村紀子「催馬楽ことばの原像」『奈良大学紀要』第31号、奈良大学、2003年、31頁。
  - (30) 山尾幸久「倭王権による近畿周辺の統合」『日本古代王権形成史論』、岩波書店、1983年、426頁。
  - (31) 中西進『万葉集 全訳注原文付』(一)、講談社、199頁。
  - (32) 同『古事記をよむ』4（河内王家の伝承）、角川書店、1986年、201頁。
  - (33) 三浦佑之「話型の伝承性——オケ王のとヲケ王」『古代叙事伝承の研究』、勉誠社、1992年、326頁。
  - (34) 山尾幸久、前掲論文、426頁。
  - (35) 同論文、427頁。
  - (36) 尾畑喜一郎「久米歌と簀力婦女譚と」『古代文学序説』、174 - 175頁。
  - (37) 同論文、180頁。



- (38) 中西進『古事記をよむ』4(河内王家の伝承)、226頁。
- (39) 長野一雄「弘計・億計二皇子の説話」『古代説話の文学的研究』、井関書店、1986年、228頁。
- (40) 大久間喜一郎「意祁・袁祁の流浪伝承」『古代歌謡と伝承文学』、埜書房、2001年、428頁。
- (41) 兼岡理恵「オケ・ヲケ「詠辞」にみる「地域性」——『播磨国風土記』美囊郡志深里条を中心に——」『古代文学』第55号、古代文学会、2016年、55頁。
- (42) 同論文、57頁。
- (43) 田中久夫「顕宗仁賢天皇・忍海氏・吉備氏と東播磨」『年中行事と民間信仰』、弘文堂、1985年、82頁。
- (44) 同論文、82頁。
- (45) 同論文、82頁。
- (46) 福本錦嶺『みきの風土記 志染の石室』、三木市観光協会、1997年、20頁。同書の内容に3本の論文を付加した別書にもまったく同一の箇所を確認することができる。同『みきの風土記 二皇子物語』、三木市観光協会、1998年、22頁。
- (47) 三木市立みき歴史資料館編『三木市立みき歴史資料館常設展示図録』、三木市立みき歴史資料館、2017年、8頁。
- (48) 飯泉健司、前掲論文、424頁。
- (49) 同論文、424頁。
- (50) 田中久夫、前掲論文、82頁。
- (51) 同論文、88頁。
- (52) 同論文、88頁。
- (53) 田中久夫「顕宗仁賢天皇神社の分布とその背景」『金銀銅鉄伝承と歴史の道』、岩田書院、1996年、281頁。
- (54) 喜多慶治「秋のコウゾウ、秋の講ぞろ」『喜多文庫民俗芸能資料』<https://kita.yg.kobe-wu.ac.jp/resources/upload/pdfs/586.pdf> (2020年4月17日)。
- (55) 田中久夫「顕宗仁賢天皇神社の分布とその背景」。
- (56) 同論文、275頁。
- (57) 同論文、276 - 277頁。
- (58) 同論文、280頁。
- (59) 稲垣足穂『タルホ大阪・明石年代記』、論風社、1991年、239頁。
- (60) 同書、239 - 240頁。
- (61) 野田猪左雄編『明石市郷土史』、大観尋常高等小学校、1929年、頁不明。
- (62) 兵庫県神職会編『兵庫県神社誌』中巻、兵庫県神職会、1938年、277頁。
- (63) 同書、282頁。
- (64) 田中久夫「顕宗仁賢天皇神社の分布とその背景」、275頁。
- (65) 同論文、282頁。
- (66) 飯泉健司、前掲論文、424頁。
- (67) 同論文、428頁。
- (68) 同論文、424頁。
- (69) 高市郡教育会編『高市郡神社誌』、名著出版、1971年、866頁。
- (70) 同書、867頁。
- (71) 阿部乾六、前掲論文、113 - 114頁。

- (72) 奥野義雄「宮座と講」明日香村編『続明日香村史』中巻、明日香村、2006年、585 - 586頁、参照。
- (73) 栢木喜一「飛鳥と多武峯」飛鳥民調査会編『飛鳥の民俗』、財団法人飛鳥保存財団、1987年。156 - 158頁、参照。
- (74) 田中久夫「顕宗仁賢天皇神社の分布とその背景」、280頁。
- (75) 大江篤「兵庫県明石市魚住町清水 清水神社の祭祀」『みかげ民俗』6号、御影民俗学研究会、1982年、34頁。
- (76) 同論文、37 - 38頁。
- (77) 同論文、39頁。
- (78) 同論文、43頁。
- (79) 同論文、40頁。
- (80) 田中久夫「顕宗仁賢天皇・忍海氏・吉備氏と東播磨」、89頁。
- (81) 京都府与謝郡府中村字難波野区『難波野郷土誌』、京都府与謝郡府中村字難波野区、1931年、285頁。
- (82) 同書、285頁。
- (83) 同書、290 - 291頁。
- (84) 加悦町編さん委員会編『加悦町誌』、加悦町役場、1974年、54頁。
- (85) 梅本政幸『丹後路の史跡めぐり』、梅本政幸、1972年、62-63頁。同様の内容は、同『丹後の史跡』、梅本政幸、1976年、145頁、にも記されている。
- (86) 京都府与謝郡府中村字難波野区『難波野郷土誌』、京都府与謝郡府中村字難波野区、1931年、299頁。
- (87) 京都府教育会加佐郡部会編『加佐郡誌』、加佐郡部会、1925年、178頁。
- (88) 五十日真黒人が二皇子を匿った経緯は、大正6年(1917)に生まれた大宮町周枳の堀広吉によってもくわしく語られている。大宮町文化財保護審議会監修『おおみやの民話』、大宮町教育委員会、1991年、429 - 431頁、参照。
- (89) 大宮町誌編纂委員会編『大宮町誌』、大宮町役場、1982年、636頁。
- (90) 同書、640頁。
- (91) 飯田武郷『日本書紀通釈』第4、大鏡閣、1923年、2456 - 2457頁。
- (92) 加悦町編さん委員会編、前掲書、54 - 55頁。
- (93) 京都府与謝郡役所編『京都府与謝郡誌』上巻、京都府与謝郡役所、1923年、164頁。
- (94) 同編『京都府与謝郡誌』下巻、京都府与謝郡役所、1923年、1064頁。
- (95) 大宮町誌編纂委員会編、前掲書、860 - 861頁。
- (96) 同書、865 - 866頁。
- (97) 同書、661 - 662頁。
- (98) 山尾幸久、前掲論文、427頁。
- (99) 井上さやか監修「灰まみれのオケとヲケ」『マンガ 始めて読む 古事記と日本書紀』、ナツメ社、2018年、参照。
- (100) 稲垣足穂、前掲書、244 - 245頁。
- (101) 加西市播磨国風土記1300年祭実行委員会編『加西市播磨国風土記一三〇〇年 新作能・新作狂言 上演のしおり』、加西市播磨国風土記1300年祭実行委員会、2015年、4頁。
- (102) 同書、7頁。
- (103) 同書、6頁。
- (104) 同書、7頁。

- (105) ななじ眺『ねひめのとき—根日女伝説×『パフェちっく』—』、神戸新聞総合出版センター、2014年、64頁。
- (106) 「根日女マンガ本プロジェクト」『播磨国風土記の里 加西』  
<http://www.fudokil300.city.kasai.hyogo.jp/nehime/index.html> (2020年4月20日)。
- (107) 同ウェブサイト。
- (108) ななじ眺、前掲書、62頁。
- (109) しもかわらゆみ、前掲論文、8頁。
- (110) 同論文、8頁。
- (111) 同論文、9頁。
- (112) 同論文、10頁。
- (113) 同論文、12頁。
- (114) 同論文、10頁。
- (115) 同論文、11頁。
- (116) 同論文、11頁。
- (117) 同論文、12頁。
- (118) 同論文、12頁。
- (119) 同論文、8頁。